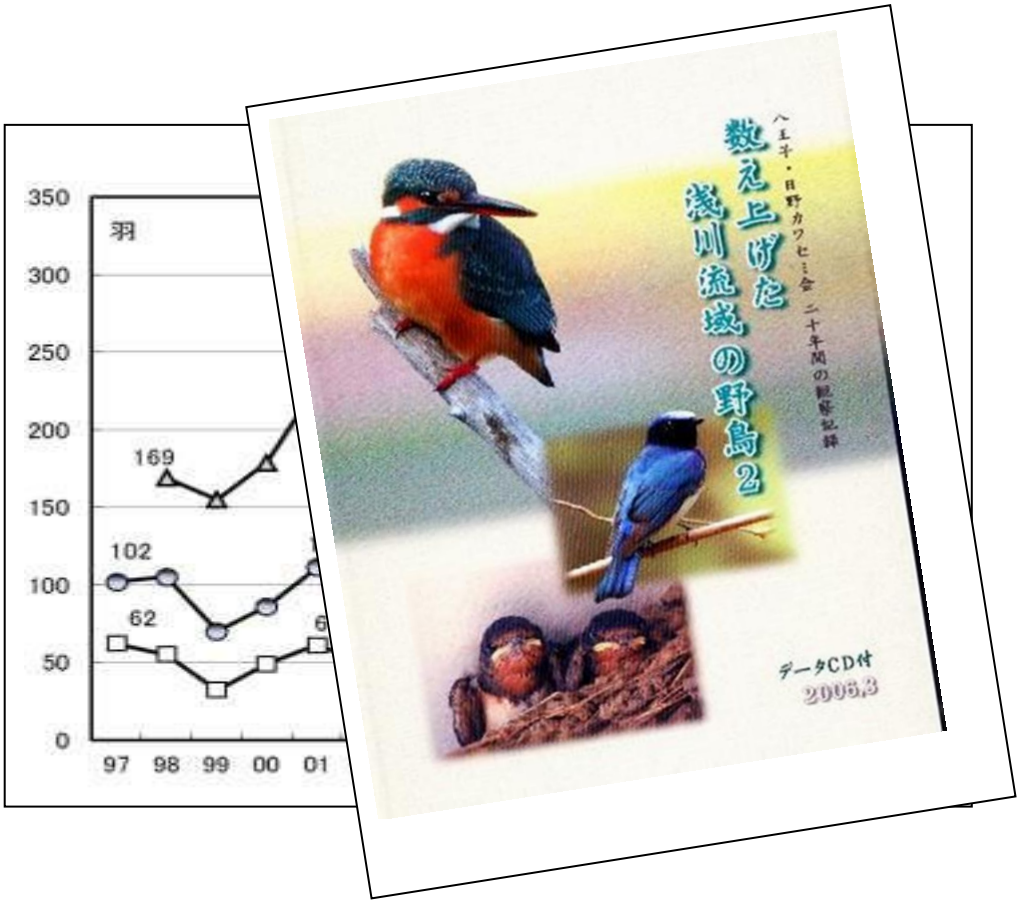
定期カウントマニュアル

（～残そう！今の野鳥記録、楽しもう！野鳥カウント～）



八王子・日野カワセミ会

も　く　じ

はじめに …… 1
1　定期カウントの目的 …… 2
2　定期カウントマニュアルの目的 …… 3
3　事前準備 …… 4
4　観察調査 …… 5
（1）　用具 …… 5
（2）　安全確保 …… 6
（3）　調査方法 …… 7
（4）　カウント …… 7
（5）　識別・同定 …… 8
（6）　時期・時間帯 …… 9
（7）　鳥合せ …… 9
5　集計・報告 …… 10
6　公表 …… 13
7　活用 …… 13
8　フィールドマナー …… 15
9　Q&A …… 16
10　各コースの概要・定期カウントコースの位置図 …… 26
①北浅川:松竹公園西～陵北大橋 …… 27
②北浅川:陵北大橋～松枝橋 …… 28
③浅川本流:松枝橋～鶴巻橋 …… 29
④浅川本流:鶴巻橋～大和田橋 …… 30
⑤浅川本流:大和田橋～長沼橋 …… 31
⑥浅川本流:長沼橋～一番橋 …… 33
⑦浅川本流:一番橋～多摩川合流 …… 34
⑧川口側:川口橋～明治橋 …… 35
⑨湯殿川:白幡橋～時田大橋 …… 36
⑩多摩川:滝山城跡下 …… 37
⑪多摩川:谷地川合流付近 …… 39
⑫多摩川:浅川合流付近 …… 40
⑬小宮公園 …… 41
⑭片倉城跡公園 …… 43
⑮長沼公園 …… 44
⑯高尾山:小仏川コース …… 45
⑰高尾山:蛇滝コース …… 46
⑱高尾山:琵琶滝コース …… 48
⑲高尾山:大垂水コース …… 49
⑳高尾山:日影沢～小仏城山コース …… 51
あとがき …… 52

～未来への継続、そして新しい「参加者」の皆様へ～

は　じ　め　に

昭和50年代に日本野鳥の会は毎年定期的に全国規模で冬鳥一斉カウントと春のシギチドリ一斉カウントを行っていました。全国の会員が力を合わせてボランティアで取り組む野鳥の一斉カウントこそ最も日本野鳥の会らしい活動でした。しかし、日本野鳥の会はいつの間にかこの活動を止めてしまいました。昭和 60 年（1985）に発足した八王子･日野カワセミ会は発足当時から大勢の会員の力を結集して野鳥の定期カウントを実施しています。

野鳥の定期カウントとは何でしょうか。私達の住む身近な環境にどのような野鳥がいるか、その野鳥が増えているか、減っているかなどを明らかにするのが定期カウントです。カワセミ会は八王子市・日野市内に 20 コースを設定して担当者を決めて月 1 回の定期カウントを行っています。実施にあたっては簡単な実施要領に基づき、共通した方法で取組んでいましたが、マニュアルはありませんでした。今般、各コースの担当者数名で委員会を立ち上げて、今までの経験を生かしてマニュアルを作成しました。

定期カウントの結果は科学的なデータといわれるものでなければなりません。この実施マニュアルは特にこの点に力点をおいて作成されています。また、定期カウント中に必要なマナー、実施にあたり生じる素朴な疑問にも答えています。20 のカウントコースにはどのような特徴があるかの解説も付いています。

この実施マニュアルが定期カウント担当者間の共通認識をより深めることに役立つことを念願します。さらに担当者だけでなく定期カウントに同行される参加者にとっても定期カウントの意義や方法を理解していただくための参考資料として活用願いたいものです。また、担当者の引き継ぎ資料として前任者がどのような方法で、どのようなことを工夫して実施していたかを知る資料としてこのマニュアルをご活用頂きたいと思います。

カワセミ会では定期カウントの他、冬鳥一斉調査、オオルリ他夏鳥一斉調査、緑地保全地域野鳥生息調査などにも取り組んでいます。この実施マニュアルをこれ等の調査にも適用します。

2014 年 3 月

八王子・日野カワセミ会会長　粕谷和夫

このマニュアルで「担当者」とは、定期カウントを実施する各コースの「実施および取りまとめの責任者」です。また、「参加者」とは、各コースの定期カウントに自由に参加して、担当者に協力する会員をいいます。

１．定期カウントの目的

野鳥は、自然環境に敏感な生き物で、環境の変化を知るバロメーターといわれています。野鳥の羽数を数えることによって、環境の変化を読み取るための科学的なデータが得られます。八王子・日野カワセミ会では「多摩川や浅川流域のどこに、どのような鳥が、おおよそ何羽いたかを継続的にカウントして記録しておくことは、将来の自然環境を考える場合、貴重な科学的データになるはずだ」との基本認識のもとに野鳥の動向を数値で掴むため、20 コースで担当者を決めて毎月 1 回の定期カウントを実施しています。

野鳥の定期カウントの必要性

①　野鳥の名前を調べる

バード - ウオッチングとは、自然の中で野鳥を観察し楽しむことをいいます。野鳥の観察の第 1 歩は、鳥の名前を知ること（調べること）から始まります。野外で暮らしている鳥を見たら、その鳥の大きさ、羽根の模様、脚や嘴の形と色、尾の形、飛び方、声などからその鳥が何という鳥か識別します。この時にその鳥が住んでいる環境や季節が大きなヒントになります。

②　野鳥の生態を調べる

鳥の名前が分かったら、それだけで満足してしまってはいけません。その鳥が何をどのように食べているか、どのように羽繕いしているか、行動範囲はどのくらいか、雄・雌の番はどのようにして決まるのか、どこで繁殖しているか、どのように子育てしているか、天敵からどのように逃れるかなどなどの疑問が次々に湧いてくる筈です。殆どの疑問は図鑑、参考書、インターネットに回答が出ていますが、本当にそうなのか実際に鳥を観察して、自分の目で確認することが大切です。このような観察を行うことは野鳥の生態調査に通じます。

自然の中で暮らす野鳥は自然環境の変化に大きな影響を受けます。自然環境が変わると今までいた野鳥がいなくなってしまうことがあります。逆に新たに別の野鳥が住みつくこともあります。地球規模で移動する渡り鳥は繁殖地の自然環境が変わらなくても越冬地の環境が変わると生息数に大きな影響を受けることも知られています。

③　野鳥の種類を継続して調べる（定性調査）

ある場所にどのような鳥がいたかを調べて記録しておくと、時代の変化とともに出現する野鳥がどのように変わるかが分かります。このような調査を定性調査といいます。定性調査の一例として、1994 年に久留米市教育委員会が出版した吉良幸世編集・執筆の「久留米の野鳥」があります。この本の中に自由学園の 30 年間（1964-1993）のバードセンサス結果が載っています。データを見ると冬鳥であったヒヨドリが 1973 年から留鳥化したこと、コゲラが 1992 年から新たに出現したこと、チゴモズが 1974 年からいなくなってしまったことなどが明確に読み取れます。定性調査からは野鳥の渡り性の区分、種別の構成比や種別の出現率なども明らかにすることができます。

④　野鳥の羽数を継続して調べる（定量調査）

定性調査だけでは種別の野鳥についてどのくらいの羽数がいたか、増えたか、減ったかなどのことがわかりません。そこで、定性調査に加えて「鳥の羽数を数える」という調査を行います。これが定量調

査です。野鳥の定量調査を特定な場所で定期的に行うことを八王子・日野カワセミ会では「野鳥の定期カウント」と呼んでいます。継続的なカウントでより詳しく鳥の生息情報を知ることができます。当然のこととして定期カウントに参加する人の識別能力が格段に向上します。また、鳥だけでなく、自然そのものに対する親しみや愛着が増し、自然とつきあう方法を知り、自然を見つめる感性が備わることにより、環境全体に目が向くようになります。

２．定期カウントマニュアルの目的

八王子・日野カワセミ会は、野鳥の定期カウントを活動の重要な柱の一つとして位置づけ、会の発足と同時に開始し、現在は 20 コースで担当者を決めて毎月 1 回、定期的に実施しています。このマニュアルには以下の５つの目的があります。

第 1 の目的は､定期カウント担当者間の共通認識をより深めることに役立てることです。20 コースで実施している定期カウントの他、オオルリ他夏鳥調査などの調査の担当者が、何のために定期カウントを実施すのかという共通認識を持って取り組む必要があり、このマニュアルはそれに応えるものです。

第 2 の目的は、統一した実施方法を採用することにより、定期カウント調査結果の精度を高め、信頼性を上げるために役立てるためです。定期カウントは定量調査ですから、各担当コースで統一された実施方法を採用しないと調査結果の精度、信頼性が下がってしまいます。

第 3 の目的は、グループで定期カウントを実施しているコースにおける参加者（協力者）に定期カウントの実施意義と実施方法を理解していただくためです。特に新しく定期カウントに参加した人に定期カウントの実施方法や協力していただく事項などの説明資料として役立たせるためです。また、このマニュアルの内容を日頃から理解しておくことにより、参加者が定期カウントの実施意義と実施方法を理解していれば、担当者が急病などで実施できなくなった時のピンチヒッターをつとめることができます。

第 4 の目的は、担当者の引き継ぎ資料として役立たせるためです。「継続は力なり」、野鳥の定期カウントは継続期間が長くなればなるほど価値が増してきます。そのためには担当者が次々に引き継がれていかなければなりません。担当者が代わった時に前任者と新任者で違った認識や方法で定期カウントを実施することは第２の目的（精度と信頼性）の阻害要因なります。前任者がどのような方法で、どのようなことを工夫して実施していたか

を知る資料としてこのマニュアルを活用することができます。

第 5 の目的は、第三者に提供するデータの信頼性を高めるためです。定期カウントの調査結果は、カワセミ会だけで利用するのではなく、行政機関、研究者、学校教育者、社会人教育者、自然保護関係者、民間のコンサルタント会社など、様々なところで引用されます。定期カウントのデータがどのような方法で得られたものかを明らかにするための資料としてこのマニュアルが役立ちます。

３．事前準備

（１）周知

定期カウントの精度、信頼性を高めるには、担当者および参加者の野鳥識別能力を高めると同時により多くの目で観察することも大切です。

① 担当者は毎月の「探鳥会あんない」に担当地区の実施予定を掲載します。
- ・定期カウントコース（場所）
- ・日時、開始時刻、終了時刻の予定
- ・集合場所
- ・担当者名と連絡先（固定電話または携帯電話）

② 当月のカウント終了時に参加者に次回の予定を告知し参加を促す。あわせて関連情報（夏鳥・冬鳥調査、緑地調査、タカの渡り調査など）を伝え、カワセミ会の活動を理解してもらうと同時にこれらの活動に積極的に参加するよう呼びかけます。

③ 「探鳥会あんない」に掲載せず単独実施している担当者も実施日を決めた時点でカワセミ会のメーリングリストを通じて周知することが望まれます。

（注）「探鳥会あんない」は毎月第 2 日曜にカワセミ会員向けに発行され、翌月の探鳥会、定期カウント日程などが掲載される。

（２）情報収集

担当者は可能な限り事前情報を集め、カウント当日の参加者にその内容を伝え、観察意識を高めてもらうように努めます。

① 担当するコースと隣接するコースの直近（2～３週間）の鳥信や前年同月の結果などをチェックしておきます。

② 鳥の出現に影響しそうな情報、例えば、次のような情報をチェックしておきます。
- ・今年の夏鳥の動きは、例年より早い・遅い。数が、多い・少ない。
- ・特定の鳥が、多い・少ない。
- ・鳥の好むエサが山野に、多い・少ない。

・サギの仲間の観察機会が減少している。

などをチェックしておく。

（３）記録用紙

調査結果を「定期カウントＥメール報告様式」、「鳥信（定期カウント用）」、カワセミ会のメーリングリストでの「定期カウント速報」などの転載に対応できるよう、以下の必要項目をもらさない工夫が必要です。

① 定期カウントコース（場所）

② 実施年月日、曜日。天候

③ 開始時刻、終了時刻

④ 参加者氏名

⑤ 観察した野鳥の種名と羽数

⑥ モズ、ジョウビタキ、ルリビタキについては雄、雌、不明の区分とそれぞれの羽数

⑦ 鳥信内容の記事（観察した場所、羽数、状況その他特記事項、区分、メッシュ）

⑧ 特記事項

（４）実施の可否

① 参加者が判断に迷う場合は担当者に確認します。

② 雨天は原則延期。小雨決行。延期する場合は、一日ずつ順延するなど具体的に表現しておくことが望まれます。

③ 担当者は集合時刻との兼ね合いで、1時間前には可否を決めておきます。

4. 観察調査

（1）用具

定期カウントでは適正な用具の使用が必要です。

① 定期カウントで使う基本的な用具と、その推奨仕様などです。

ア 双眼鏡

明るくて見やすい双眼鏡を使用する。

・標準は８倍、７～１０倍程度（これを超える倍率では手振れ補正機能が欲しい）

・有名な光学機器メーカーの野鳥観察向け双眼鏡

・調査用双眼鏡は口径３０ｍｍ程度、またはそれ以上

イ 野鳥図鑑

種の識別・同定がしやすく、雌雄、成鳥・若鳥・幼鳥、冬羽・夏羽などがわかる野鳥図鑑

（電子野鳥図鑑の場合は、鳴き声を野外で流さないように気をつけること。）

ウ　ノートまたは記録用紙

エ　その他(時計・コンパス)

② 定期カウント結果の精度を高めるなどのためにフィールドスコープや高倍率カメラがあると有効です。

以下は使用するねらいです。

・双眼鏡では見えづらいところの確認

・種の識別・同定を複数人で確認

・証拠写真を残す

・初心者に実物の鳥を見てもらう

（２）安全の確保

定期カウントでは事故を起こさないことが第一です。事故に備えて救急用品を持参することが望まれます。万が一怪我した場合は傷害保険の対象になります(総会資料「八王子・日野カワセミ会の傷害保険契約について」(参照)。

① 服装

服装は事故を防ぎ天候の変化に対応できるものを着用します。

・ハイキング程度の服装とする。(帽子、長袖・長ズボン、上着、シューズ、雨具、ザック)

・秋のスズメバチの危険な季節は黒系の服装は避ける。

（服装の色は、赤や黄色の原色などの派手な色は避けることが望ましい。）

② 事故防止と事故時の対応

次のような、事故の要因とその防止方法や事故時の対応方法を理解しておくことが大切です。　以下は例示です。

・転倒や滑落・・・滑りづらい靴を着用、凍結場所は軽アイゼンを使用、谷側により過ぎない。

・ヘビ・・・ヘビの出やすい場所では、長靴かハイカットの靴を着用する（できればヤブを避ける)。
噛まれたら安静にして早急に医療機関に連絡する（できれば吸引器で毒を吸引)。

・ハチ・・・ 黒系の服装や香水は避ける。出会ったら静かにその場所から離れる。
刺されたら安静にして早急に医療機関に連絡する。

・マダニ・・・肌の露出を防ぎ、草木の葉になるべく接触しない。咬まれたら無理に取り除かず医療機関で処置する。
肌の露出は首に手ぬぐい、シャツの袖口を手袋に入れる、ズボンのすそを靴下に入れる、スパッツを履くなどで防げる。

・クマ・・・クマ出没情報がある場所には一人では行かない。定期的に話し声や鈴

の音を流す。

・密猟者・・・密猟者を見たら直接注意せず、あとで会長と警察に状況を報告する。

・交通事故・・・ランニング・ウォーキングの人や自転車との接触を避けるため道路の片側を歩く。

（３）調査方法

定期カウントは、ラインセンサス法（注）と呼ばれるものに準じて行いますが、定期カウントコースによって環境条件が異なるためセンサスルート長、観察半径、歩行速度について、厳密な適用は行いません。

① 定期カウントのコース毎に設定したルートを歩いて、概ね半径２００ｍの範囲内に出現する野鳥の姿や鳴き声により識別し、種別毎に羽数をカウントします。鳥種の識別および羽数の確認が困難な場合は、双眼鏡または望遠鏡を用いて確認します。

② 定期カウントは毎月１回のみとし、同一ルートを複数回または他の日にカウントしたものは定期カウントに含みません。

③ 通行止めなどにより設定ルートが歩けない場合は、迂回などを行ってカウントし、その旨を特記事項に記入、報告します。

④ 隣接する他コースとの境界を越えて見えた野鳥はカウントに含まないこととします。

（注）ラインセンサス法とは、あらかじめ設定しておいたセンサスルート上を歩いて，一定の範囲内に出現する鳥類を姿や鳴き声により識別し，種別個体数を計数する方法であり、鳥類の調査で多く用いられている。多くの場合，センサスルート長２～３㎞，観察半径 50m，歩行速度 1.5～２㎞/h で１回行われる。ルートセンサス法とも言う。

（出典：一般財団法人九州環境管理協会　「環境に関する情報集」より抜粋）

（４）カウント

定期カウントでは、次のように羽数をカウントします。

① 原則として、日本鳥類目録改訂第７版（日本鳥学会刊）に収録されている種（本種と亜種）をカウントします。ただし、識別・同定できなかった種や第７版に収録されていない種及び収録されていないと思われる種の場合には、「不明種」としてカウントします。

・成鳥・亜成鳥・若鳥・幼鳥・雛（巣立ち）の全ての羽数をカウントする。ただし、落鳥個体や巣中の雛、卵の状態の場合はカウントしない。

・雌雄区別しないでカウントする。但し、モズ・ジョウビタキ・ルリビタキについては、別途調査のため雌雄別にカウントする。

・留鳥・漂鳥・夏鳥・冬鳥・旅鳥・迷鳥など、全ての個体をカウントする。

・飛翔個体も含め、姿を確認した全ての個体をカウントする。
・地鳴き・さえずりなどの鳴き声のみにより個体を確認した場合もカウントする。
② ルートが重複する場合の復路では、次の場合のみカウントします。
・それまでに確認されてなく、従ってカウントされていない種が出現した場合。
・それまでに確認されカウントした種でも、それまでにカウントした羽数以上の個体が出現した場合。
③ 原則として、複数人が確認した種および個体をカウントします。
・重複カウントを避けるため、複数人で観察・調査する場合には、なるべくまとまって行動し、野鳥の姿を確認したら全員に聞こえる程度の声で、種と羽数を伝え、複数人で確認するように努める。また、最終的には担当者が種および羽数をその場で確定する。
・いわゆる「普通種」（同カウントコースで季節も含め通常見られる種）は、ある程度の観察歴がある方が単独で確認した場合にはこの限りでないものとする。
・定期カウントの終了時には、必ず参加者全員で「鳥合せ」を行い、当該カウントの種の種類と種数および各種の確認羽数を最終確定する。
④ 鳴き声のみでの観察で羽数が確定できない場合は、確定数＋（例、８＋）とカウントします。姿の確認と鳴き声の観察の場合も同様とします。また、大きな群れの場合は、群れの大きさに合わせ、１００羽や１０００羽の単位でカウントし、確定数±（例、１００±）とカウントします。
⑤ 出現種名と種数及び確認羽数の記録方法は特に規定するものではないが、「正」で行うのが一般的です。また、群れなどの場合には「数取器」（例、内田洋行製）を使うことも考えられます。
・過去のデータを参考に出現が予想される野鳥種のリスト表（アイウエオ順）を作成して配布し、記録するのも確実性の高い方法である。

（５）識別・同定

定期カウントでは、次のように観察種の識別・同定を行います。
① 原則として種の識別・同定（識別し、種を確定することを「同定」と言う。）は、全ての種において複数人で行うものとします。ただし、いわゆる「普通種」は、ある程度の観察歴がある方の識別・同定の場合や単独で定期カウントする場合はこの限りではないものとします。
・なるべく複数の特徴（識別ポイント）を確認し、同定するようにする。
② 識別・同定にあたっては、季節・場所（地域・環境）・大きさ・形・姿勢（含、飛翔の時の姿勢）・色の模様・声・動作・習性をよく観察して行うようにします。
・各成長段階（雛から成鳥まで、特に雛や幼鳥）、換羽の時期、鳴き声、個体差、変異、交雑、光線具合、特定の種（例、特に、シギ科・カモメ科・ムシクイ科・

センニュウ科等）など、識別・同定に難しさが伴うことが多いので慎重に行うように心がける。

・なるべく複数の図鑑を参照しながら識別・同定するようにする。（参考、日本野鳥の会刊「フィールドガイド日本の野鳥」等の絵図鑑や平凡社刊「日本の野鳥６５０」等の写真図鑑）

③　いわゆる「普通種」以外の種が出現した場合には、はやる気持ちを抑え“先ず、普通種から”を念頭に置いて、識別・同定作業を行うよう心がけるようにします。

・嘴・顔・上面・下面・翼や尾の形や長さなどをよく観察しスケッチしたり、写真撮影したりしておくことも識別・同定の一助となる。

・無理矢理同定する必要はないし、むしろしないように心がける。

④　後日も含め種を識別・同定できなかった（不明種）場合には、「不明種」として観察リストに入れ、特記事項欄に場所・特徴等を記入し報告します。なお、目・科・属および近似種を可能な分類まで確定し、附記します。

⑤　日本鳥類目録改訂第７版（日本鳥学会刊）に収録されていない種および収録されていないと思われる種の場合には、山階鳥類研究所などの信頼できる機関に鑑定依頼するなどの取り組みも考えられます。

（６）時期、時間帯

定期カウント全体及び各コースの精度と信頼性を高めるため、次の事項に留意した時期及び時間帯で実施することが望まれます。

①　定期カウントは、原則として毎月 1 回 15 日までに実施します。各月の実施時期は、担当者の都合のいい日に設定しますが、第１土曜日、毎月 5 日など同じ時期に実施することが望まれます。

②　実施時間は、原則として年間、または季節を通して一定になるようにします。特に、開始時刻は引継ぎ後のことや多くの会員が集まりやすい午前 9 時頃までに設定します。

例、８時開始、12 時終了、　夏季８時開始、冬季９時開始など。

③　終了時刻は、出来るだけ毎月同じ時刻に終わるよう努めるが、当日の天候、コース事情、鳥の出現状況などにより担当者の判断で時間を適宜伸縮します。

（７）鳥合せ

参加者同士が鳥の出現種・羽数の確認を行うため必ず鳥合せを行います。

①　カウント終了後は、記録用紙等に出現種名、羽数、月日、時間、天気等を参加者同士で確認し合います。

②　鳥合わせの際に、野鳥の特異な行動、希少種、渡りなどを出し合い確認するこ

とが望まれます。

③ 次回のカウント日時や野鳥の情報交換などを行います。

④ 開始時刻前、鳥合せ後に確認した鳥はカウントに入れません。

５．集計・報告

（１）集計（定期カウント結果を統一様式に転記）

野帳又は記録用紙に記録された定期カウントの結果をその日のうちに（又は数日内に）定期カウント結果の統一様式に転記します。パソコン利用が可能であればエクセルの統一様式に入力します。統一様式に載っている鳥の種類数が多いが、これは過去に定期カウントの何処かの地域で、１回以上出現した野鳥を網羅しているためで、経年変化を取りまとめることの便宜を考慮しているためです。このため、当該コースで出現可能性が無いという理由だけで削除しないようにします。

〈参考〉

当該コースに出現可能性が無い鳥は、エクセルの行を削除するのではなく、次のいずれかの措置をとればあたかも削除したようになります。

① 出現可能性が無い行の幅を極端に狭くする。

② 行をグループ化する。方法は、グループ化する複数行を反転⇒データ⇒グループとアウトラインの設定⇒グループ化。グループ化の解除は逆の手順を踏む。連続する複数行をグループ化すると、グループ化した行の範囲を示す縦の黒い線が表示され、線の一番下に＋、－のいずれかが表示される。－をクリックすると選択した範囲の行が隠れ、＋をクリックすると元にもどる。

統一様式に入力する時の注意事項は以下の通りです。

① 観察者氏名のセルには、記号で毎月の参加者全員を必ず記入する。観察者の記号は表外に明記する。観察者の順番は、担当者を先頭に以下は氏名の五十音順とする。

② 月日は、例えば「１＊１２」、「１：１２」、「１月１２日」等色々な書き方があるが、「年／月／日」のように半角数字とスラッシュ「／」で記入する。例えば「2015/2/15」という書き方になる。西暦年号も必ず入れる。（理由は、環境省生物多様性センターのモニタリング１０００のサイトに入力するための統一フォームに合わせるためです）

③ 種毎の羽数が概数の時は、＋、－、±を右側の狭い列のセルに記載する。

④ アメリカコガモ等の亜種を観察した場合は、「内数」として亜種の行のセルに羽数を記載する。

⑤ モズ、ルリビタキ、ジョウビタキは、「♂」、「♀」、「不明」の羽数を「内数」

として該当の行のセルに記載する。（モズは「幼鳥」を加える）

⑥　出現総数と種類数はエクセルの計算機能を使って集計する。その際の亜種、♂♀別等の内数が含まれないように注意することが必要です。

⑦　「太字で斜線の鳥」を観察したときは、統一様式に羽数を記載するだけでなく、観察場所、羽数、状況等を別途「鳥信」の様式にも記載する。メッシュが分からない時は空欄でもよいが、カワセミ会のＨＰの会員専用頁に載っている地図を参照する。写真を撮った時は、「フォト鳥信」も活用する。

「太字で斜線の鳥」以外の鳥でも、変わった行動、営巣・繁殖行動、鳥の死体等が認められた場合は鳥信に取りあげる。また、今まで記録が無かった鳥やあったとしても数回しか記録されていない鳥の場合は、その鳥の識別理由のメモを添える。

⑧　表の最後に「特記事項」をメモとして 300 字以内で記載する。特記事項には鳥信に記載した鳥の様子、定期カウントコースの環境変化、鳥以外の生きものの観察記録を適宜記載する。

⑨　転記が終了したら、当日の参加者に依頼して、転記ミスがないかどうか「校正」を依頼することが望ましい。

⑩　パソコンを利用できない担当者のデータは、紙ベースで定期カウント事務局に渡し、当事務局で統一様式に入力する。

⑪　報告用紙は前年の 12 月に事務局から担当者に送られる。

次頁の統一様式入力の注意事項　参照

（２）報告

①　定期カウント事務局への報告

担当者は、毎月のカウント終了後定期カウントの統一様式に記載した内容を事務局に報告します。この際に鳥信も一緒に報告します。毎月の報告が困難な場合は３～４ヶ月に１回位の割合で報告します。報告の方法はＥメール添付を基本とします。

事務局は粕谷和夫です。　Kasuya.kazuo688@gmail.com

②　カワセミ会のメーリングリストを通じた速報

担当者は、毎月の定期カウントが終了したら、できるだけ速やかに出現種とその羽数、特記事項等の内容を中心にカワセミ会 ML に速報として報告することが望まれます。

統一様式入力の注意事項

２０１４年定期カウント報告　　調査コース：一番橋～多摩川合流

調査者記号：A浅川二郎、Tt多摩川太郎、Tk高尾和子

１．定期カウントマニュアル（残そう！今の野鳥記録、楽しもう！野鳥カウント）に沿

第7版番号（新）	参考：第6版番号(旧)		1月		2月		3月		4月	
		月＊日	2014/1/	＋	2014/2/12	＋	2014/3/	＋	2014/4/	＋
		開始　時；分		－		－		－		－
		終了　時；分		±		±		±		±
		天候（前後）								
		調査者記号	Tk、A、Tt							
4	***160***	***ヤマドリ***								
5	161	キジ								
27	***98***	***ヨシガモ***								
28	100	ヒドリガモ								
29	***101***	***アメリカヒドリ***								
30	94	マガモ								
32	95	カルガモ								
34	104	ハシビロガモ								
35	102	オナガガモ								
36	***103***	***シマアジ***								
		コガモ								
以下は内数を記載する										
38*2	***96*2***	***アメリカコガモ***								
420-1	*388-1*	***モズ♂***								
420-2	*388-2*	***モズ♀***								
420-3	*388-3*	***モズ幼鳥***								
420-4	*388-4*	***モズ不明***								
477*2	***448*2***	***コメボソムシクイ***								
出現総羽数										
種類数			0		0	0	0		0	

・月日は、半角数字とスラッシュで西暦年号も入れて、例えば「2014/2/12」と表示する。（環境省生物多様性センターのモニタリング　１０００サイトの統一フォームに対応するため。）

・記号で毎月の参加者全員を必ず記入する。
・観察者の記号は、この報告書2行目「調査者記号」欄に明記する。
・順番は、担当者を先頭に以下は氏名の五十音順とする。

・「太文字で下線の鳥」を観察したときは、本表での報告の他に「鳥信」、写真を撮ったときは「フォト鳥信」でも報告する。（メッシュ番号は、カワセミ会HPの会員専用頁に載っている地図を参照、分からないときは空欄でもよい。）

・アメリカコガモ等の亜種を観察した場合はコガモ「内数」として記載する。また、別途、表下部の内数欄に羽数を記載する。

・モズ、ルリビタキ、ジョウビタキは、♂、♀、不明、幼鳥（モズ）の内訳を記載する。

・出現総数と種類数はエクセルの計算機能を使って集計する。その際、上記亜種、♂♀等の内数欄は含めないよう注意する。

ゴシック（太字斜体アンダーライン）の鳥、この表以外の鳥、変わった行動、営巣・繁殖行動、鳥の

特記事項（不明鳥の観察状況や環境の変化は必ず特記事項に

2014/1/

20

20

・出来るだけ300字以内で記載する。
・鳥以外の生きものの観察記録やコースの環境変化も適宜報告する。

・転記が終わったら当日の参加者に「校正」をお願いすることが望ましい。
・パソコンを利用できない方は、紙ベースで記載してもいいです。

６．公表

（１）会報かわせみで公表

定期カウントの結果は年２回発行する会報「かわせみ」の春号に前年１年分のデータが各コース別にまとめて毎年公表されます。

（２）カワセミ会の調査観察データの年報に掲載

カワセミ会の調査、カウントなど各種データは、鳥信、冬鳥一斉カウント、オオルリ他夏鳥調査、カルガモ・イワツバメ繁殖調査、集団ねぐら調査などとともに調査開始年から最新年までのデータを収めたDVDに掲載されます。

（３）環境省の「モニタリングサイト１０００」に登録

環境省が進めている「モニタリングサイト１０００」に NPO 法人バードリサーチを経由して毎年データを送っています。

７．活用

（１）数え上げた浅川の野鳥

10年ごとに蓄積されたデータをまとめた冊子を発行しています。1996年には、10年間の調査記録をとりまとめた「数えあげた浅川の野鳥」を出版し、2006年には会発足20年を記念して、20年間の野鳥調査記録をまとめた「数え上げた浅川流域の野鳥２」を刊行しました。「数え上あげた・・・」という名称は、野鳥の羽数や巣の数を「数えて、記録し、それを蓄積」したものという意味が込められています。

（２）鳥類目録の作成に活用

カワセミ会では発足30年記念事業の一環として八王子市・日野市の野鳥目録を作成することとしています。この目録作成の中核資料として活用されます。

（３）東京都のレッドデータブック改定業務に活用

東京都が2008～09年に行った東京都のレッドデータブック改定業務に定期カウントのデータが活用されました。

（４）日本野鳥の会東京が作成した東京都野鳥目録の作成に活用

日本野鳥の会東京支部は2000年に東京都産鳥類目録（自治体編）をまとめました。この中で八王子市、日野市編の作成に定期カウント結果が活用されました。

（５）八王子市史（自然編）の作成に活用

八王子市が市制 100 年記念事業として進めている市史編纂の中の野鳥編のまとめに活用されました。

（６）（財）日本自然保護協会主催の「市民調査全国大会」で発表

市民が調査する自然環境調査は、地域の自然の豊かさを理解することや、保全対策の基礎情報となるなど、自然を守る大きな力になる。この力をもっと大きくしていくために、全国各地で市民調査を行っている人たちが一同に集まる「市民調査全国大会」が2010年７月に東京で開催されました。この全国大会で会長が「野鳥の定期カウントを20年続

けると何がわかるか」を発表しました。

（７）多摩川流域市民学会で発表

多摩川流域市民学会の第 4 回大会が 2013 年 1 月に都立日野高校で、テーマを「生きもの」と定めて開催されました。この大会で会長が「多摩川の八王子・日野市域における 25 年間の野鳥の変遷」を発表しました。

（８）外部の研究者等による引用例

カワセミ会の定期カウントのデータは外部の研究者等からも引用（利用）されていまする。以下にその例を示します。

荒木田葉月・三橋弘宗：大都市圏におけるヒバリの繁殖適地と経年変化からみた存続可能性の評価、保全生態学研究 13（2008 年）、荒木田葉月（徳島大学大学院先端技術科学教育部生態系管理工学研究室）

池田浩明、大澤剛士：農地利用の変化と生物多様性の関係（独立行政法人農業環境研究所）

市田則孝：オオヨシキリの減少（バタフライ・ウオッチング協会代表、鳥もいない、虫もいない～新農薬ネオニコチノイドの実態と無農薬のとりくみ～　シンポジュウム 2013 年 5 月）

絵；大室君子（元会員）

８．フィールドマナー（野鳥観察会マナー）

（１）集合

・時間を厳守し、顔合せでは大きな声ではっきりと挨拶しましょう。

（２）歩行

① 先頭を歩く担当者の前には、原則として出ないようにしましょう。

② 野鳥の観察、カウントの時に「野鳥の声に耳を傾けること」は基本的に重要です。野鳥の姿（目で捉える情報）より声（耳で捕らえる情報）の方が先に入って来ることが多いからです。どんな場合でも大きな声、大きな動作、及び長話は控えて、野鳥の声、動作に耳を傾け、目を凝らしましょう。

③ 常に他人の邪魔にならないようにしましょう。特に三脚や集団で道をふさがないように最大の注意が必要です。

④ 他人とのすれ違い時、特にランニング・自転車等スピードのある道路利用者との間には、事故発生の恐れがあります。全員で声を掛け合い同じ側に寄り、事故防止に留意しましょう。後方からの注意喚起は前送りで順番に声を掛けましょう。大声で叫ぶのは控えめにいたしましょう。

⑤ 全体の行動が遅れるため、先頭から離れ過ぎないよう注意しましょう。
集団行動では大切なマナーです。

（３）ゴミ

休憩など、カウント中に出た小さなゴミでも捨てずに持ち帰りましょう。また全行程内に落ちていた、他人の小さなゴミでも拾う気持ちが大切です。

（４）注意

① 道から外れず又植物や昆虫等の採取は厳禁です。自然を大切にしましょう。

② 子育て中の野鳥の巣には近づかないようにしましょう。親鳥の巣の放棄につながります。

③ 人や人家に双眼鏡、望遠鏡を向けないよう注意しましょう。

（５）観察

① 人に頼らずなるべく鳥を自分で見つける努力が大切です。野鳥図鑑は必ず持ち歩きましょう。

② スコープを見せていただく場合、多くの人が見られるよう少しでも早く次の人に譲りましょう。

③ 定期カウントの目的に合わない写真の撮影は控えましょう。

（６）鳥合せ

・速やかに集合し、鳥合せを行います。記録し資料として役立てましょう。

（７）散会

・野鳥観察会は担当者の挨拶で終了、散会です。

９．Q&A

Q1　定期カウントに参加したいのですがどうすればいいでしょうか。また、何処のコースでも参加できるのでしょうか。

A　毎月発行される「探鳥会あんない」の最後に、「野鳥定期カウント実施予定」が記載されているコースは誰でも参加できます。予定ですから変更もありますので、担当者に確認をとってご参加下さい。

なお、それ以外のコースは「定期総会議案書」の「定期カウント実施場所と担当者」欄に記載されています。担当者と連絡をとってご参加ください。

定期カウントコースは全２０箇所です。　　＜参照　マニュアル 3－（1）＞

Q2　「カウントは毎月行う。」とありますが何故毎月ですか、季節ごと、夏は除く、半月毎ではだめですか？

A　カワセミ会のカウントは、既に 20 数年間継続して毎月１回のペースで行われてきました。このペースを踏襲し継続することが定期カウントの目的「野鳥の動向を数値で見る科学的なデータ」となると考えられるので毎月１回としました。また、調査にあたる会員の体力や体制から１か月間隔としています。ご質問の、季節毎、半月毎なども長期間継続されれば、データとして価値あるものと考えられます。

カワセミ会の調査では、秋のタカの渡り調査はシーズン中毎日、緑地保全調査は繁殖期と越冬期、夏鳥調査や冬鳥一斉調査はその時季、のように目的に沿った時期、回数を設定しています。　　＜参照　マニュアル 4－（6）＞

Q3　体調が悪くカウントの担当を続けることが難しくなってきました。誰かに交代してほしいのですがどうしたらいいでしょうか？

A　先ずその旨を会長に連絡するとともに、毎月一緒にカウントしている方々に代わって貰えるか募ってみてください。その結果を会長に連絡してください。

Q4　50 種位の野鳥の識別ができます。何処かホームグランドを見つけカワセミ会としてカウントを始めたいのですがどうしたらいいでしょうか？

また、カウントは、１人でも出来ますか、複数者で行った方がよいのですか。複数者でカウントする時にカワセミ会会員以外の人がいてもいいのでしょうか？

A　個人的にカワセミ会の定期カウントマニュアルに準じて数ヵ月～１年間実施して、結果を記録してみてください。その結果を会報「かわせみ」に投稿してはいかがでしょう。

自主的カウントは１人で実施して結構ですが、複数の参加者がいると、より多くの

目で野鳥を探すことができ、また鳥種の識別、羽数のカウントについても相談ができるので、より信頼性の高い結果を得ることができます。参加者は一般の方でも結構です。野鳥に関する知識のある方であれば、鳥種の識別の手助けになります。また知識がない方であれば、カウントを通して野鳥に興味を持ってもらうことができます。

Q5　初心者も詳しい図鑑を持ってゆくのでしょうか、また、ズーム双眼鏡は、使えないのでしょうか？

Ａ１　初心者は詳しい図鑑は必要ありません。詳しい図鑑は基礎知識や経験がない初心者にはわかりづらいためです。質問があったら詳しい図鑑を持っているベテランに聞いてください。

なお、初心者として次の図鑑を推奨します。

ハンディ図鑑　　新・山野の鳥　改訂版　￥６３０　日本野鳥の会発行

ハンディ図鑑　　新・水辺の鳥　改訂版　￥６３０　日本野鳥の会発行

この図鑑で野鳥の基本を理解してから詳しい図鑑を手に入れるのが良いと思います。

Ａ２　ズーム双眼鏡は、探鳥には不向きです。

手持ちの双眼鏡の倍率は１０倍が限界です。倍率が上がると視界が狭くなり野鳥をとらえづらく、手振れが大きくなることで種の識別が困難になります。１０倍超では手振れ補正機能のついた双眼鏡か三脚への装着が必要でしょう。

ズーム双眼鏡を１０倍以下で使ったとしても、普通の双眼鏡に比べ性能（視界・明るさ・解像度）的に不利です。ベテランの意見を聞いて８倍くらいの見やすい双眼鏡を手にいれてください。

＜参照　マニュアル４－（1）＞

Q6　カウント中に双眼鏡を持った野鳥観察のベテランと思われる市民（会員）に会いました。〇〇橋の下にカワセミ（〇〇〇）がいたと教えて貰いました。我々のカウントではカワセミ（〇〇〇）を確認できませんでした。この情報でカワセミ（〇〇〇）をカウントしていいでしょうか？

Ａ　定期カウント中に他の方から情報を得るのは、問題ありません。しかし定期カウント参加者が実際に野鳥を確認できない場合はカウントには含みません。

また得られた情報の場所が定期カウントコースから外れている場合は、その時はその場所へ行くことは止めましょう。定期カウントとは別の機会に行くことは構いません。

Q7　多くの会員が参加したカウントの日が強風等で出現数が少ないので、一人で再調査しました。出現数の多い方を報告していいのでしょうか？

Ａ　定期カウントの結果はその日の環境条件で実施した結果をあるがままに報告します。定期カウントには精度、信頼性を高めることが要求されますので、結果の数が多い少

ないなどにより恣意的に変更することはしません。

Q8　まとまった時間が取れないので、カウントコースを分け、日を変えて実施して合計していいでしょうか？

A　定期カウントは与えられた環境条件の下で午前中に実施することが基本になります。日を分けて実施することは結果の精度、信頼性に欠けることにつながります。どうしても時間が取れない場合は、ほかの人に交代してもらうか、その状態が継続する場合は担当を変わってもらったほうがいいでしょう。

Q9　カウントの途中で雨が降り出し打ち切ったとき、又、中断したとき、その後をどうすればいいのでしょうか？

① 実施した分のみでいいのか、

② 後日初めからやり直すのか、

③ 後日打ち切った先からカウントして、加えるのか

④ 雨が止んだ後継続していいのか

A　定期カウントの結果は精度と信頼性が求められますので、②　後日初めからやり直すことが正解です。

ただし、雨が短時間（1 時間以内）で止んだ場合は継続して差し支えないでしょう。

Q10　死体の鳥をカウント中に見つけた時に、これもカウント対象とするのでしょうか？

A　落鳥（鳥が木から落ちて死ぬことから、鳥が死ぬことを“らくちょう”といい、死んだ鳥のことを落鳥個体、といいます。）した鳥（死体）はカウントの対象にはしません。

定期カウントは、「生きている鳥の羽数」をカウントするのであって、「生きていた鳥の羽数」をカウントするのではないからです。ついさっきまで生きていた個体であってもカウントの対象ではありません。ただし、定期カウント中に落鳥個体を見つけた場合には、種名・羽数・死因・見つけた時の状況などを特記事項欄に記入し、報告します。「生きていた鳥」の情報も大切です。

＜参照　マニュアル４－（４）－①＞

Q11　夏鳥調査ではオオルリ等は♂のみをカウントし、♀は数えないとありますが、定期カウントでも♀は数えないのでしょうか？

A　定期カウントは、「すべての羽数をカウントします」ので、雌雄の区別はせずにカウントします。一方、カワセミ会の夏鳥調査では、繁殖への影響を配慮して♂のみカウントします。　＜参照　マニュアル４－（４）－①＞

Q12　数百m先の高木に大きなが鳥が止まっています。カワウであれば双眼鏡で、タカであれば望遠鏡を使って識別できます。カウントしていいでしょうか？　また、左右のカウント対象範囲を何メートル位にするのでしょうか？

A　定期カウントの対象範囲は、概ね半径２００ｍの範囲内としています。それを超える場合はカウントには含みません。鳥種が識別できない場合は双眼鏡や望遠鏡を用いて確認し、それでも識別できない場合は、不明種としてカウントリスト（観察リスト）に載せ報告します。

半径 200mの範囲外でオオタカ、ノスリ等のタカ類やその他希少種を観察した場合は特記事項に記載するとともに鳥信に報告します。

＜参照　マニュアル４－（４）－①　、4－（5）－③＞

Q13　他のカウントコースと境界の橋の下にイワツバメが営巣しています。橋を挟んで自分のカウントコースと隣のコースを飛び交っています。どちらでカウントすればいいのでしょうか？

A　自分のカウントコース側のみをカウントします。なお、境界部橋下の羽数は、下流側の担当者がカウントします。

Q14　上空をカワウの群れが上流方向へ通過しました。しばらくして、下流方向へ戻る個体がいます。片道のカウントでいいのでしょうか？

また、上空を通過しただけの鳥もカウント対象としていいでしょうか？

A　先ず、上空を通過しただけの個体もカウントします。定期カウントでは、飛翔個体も含め、姿を確認した全ての個体をカウントするのが原則となります。

次に、戻る個体の扱いですが、明らかに同一個体であると確認できた個体はカウントしません。同一個体と確認できなかった場合には戻る個体もカウントします。

裸眼・双眼鏡等で上空通過個体を追尾していたものが、飛翔方向を変え戻ってきた場合などはカウントしないことになります。

＜参照　マニュアル４－（４）－①＞

Q15　カウント中に猛禽類や小鳥の巣を見つけました。ヒナもいます。記録（証拠）の写真撮影はいいでしょうか？また、このことを速報の特記事項や鳥信でメーリングリストに記載していいのでしょうか？

A　営巣中の猛禽類や小鳥の巣を見つけても近づかずにそっとしておきましょう。調査のための観察や撮影であっても営巣中の巣に近づくことで野鳥の繁殖に影響を与え営巣を放棄する危険性があります。営巣中の野鳥写真は公開できませんし、写真を見てしまった人からの情報洩れでたくさんの人が集まってしまう危険性があるので、営巣中の撮影は避け巣立ち後にそっと撮影しましょう。

ツバメなどの身近な鳥は上記の限りではありませんが、鳥に迷惑をかけないよう愛情を持って接してください。また、猛禽や希少種の巣を見つけたら、定期カウント速報や鳥信では公開せずに会長に連絡して判断を仰ぎましょう。当然、e-mail、掲示板、Blog、fecebook などでの情報発信は避けてください。

Q16　足環などを着けた鳥を見つけたときはどのようにしたら良いのでしょうか？

A　足環は、渡りを重点とする鳥類の標識（足環）調査で、一羽一羽の鳥を区別するために記号や番号をつけたものです。

環境省が山階鳥類研究所に委託して実施しているこの鳥類標識調査は、私たちの定期カウントと同趣旨で行われている活動なので、積極的に協力するようにしたいものです。

足環をつけた鳥をみつけた場合には、次のように報告します。

・報告先　山階鳥類研究所保全研究室（鳥類標識センター）

℡０４－７１８２－１１０７

Ｅ-mail　BMRC@yamashina.or.jp

・報告内容　回収者名、連絡先、足環番号・記号、回収期日、回収場所、種名、性別、年齢

回収したときの状況（保護している場合は収容先、落鳥個体は死因、死後経過）

なお、足環だけでなくカラーマーキング、フラッグをつけた鳥を見つけたときも報告しましょう。　　＜参照　山階鳥類研究所ＨＰ「渡り鳥と足環」＞

Q17　カウント結果の報告様式に網掛けの鳥があり、観察記録（特記事項）の報告を求めていますが、なぜ特定の鳥だけなのでしょうか？また、この基準は何ですか、どのような事を記載するのか。字数に制限があるのでしょうか？

A　「網掛けの鳥」は「鳥信」に観察記録の報告を依頼する鳥です。「鳥信」とは、主に希少種、注目種、鳥の変わった行動、営巣・繁殖行動、渡り鳥の初認などの記録を第三者に知らせるデータです。定期カウント結果報告様式にある網掛けの鳥が「特定の鳥だけ」の理由は、「出現頻度が低い鳥という大まかな基準」で絞ったことによります。

なお、定期カウントに限定せずに鳥信に報告する基準は以下のとおりです。記載する内容は、種名・観察年月日・羽数・観察場所・観察時の状況・観察者氏名（実名）・メッシュ（不明の場合は未記載）で、字数に制限はありませんが事実を端的に簡潔に書き、主観的報告は避けて下さい。

１．渡り鳥の初認、終認、通過等の記録

２．野鳥の繁殖に関する記録

３．希少種（定義はありません）の記録
４．猛禽類、シギチドリ類、托卵鳥の記録
５．野鳥のねぐらの記録
６．野鳥の特徴的な行動（定義はありません）の記録
７．人との関わりに関する記録（外来鳥、密猟の状況、飼育されている野鳥、野鳥の死体、交通事故、ガラス衝突事故、農薬事故、防鳥網事故など）
８．鳥以外の動物の記録（キツネ、タヌキ、イノシシ、ムササビ、リスなどの哺乳類、カジカガエル、トウキョウサンショウウオなどの両生類、ゲンジボタル等の昆虫類など、鳥以外の環境指標的な動物）

Q18　「鳥信データベース」とはなにか、「鳥信」にも報告しなければいけない理由はなんでしょうか？

A「鳥信データベース」とは、蓄積された「鳥信」を容易に検索・抽出などにより再利用をできるようにしたものです。カワセミ会には、1983 年から 2012 年までに 17,823 件の鳥信がパソコンのエクセルでデータベースとして整理されています。今後 2013 年以降の鳥信も順次データベースに追加されます。「鳥信データベース」は 2014 年 1 月発行の「DVD 八王子・日野の野鳥の記録（1985 年から 2012 年）」に収録されていますので、この DVD を利用すれば、誰でも検索・抽出することができます。例えば、セイタカシギの観察例、北浅川の陵北大橋付近での野鳥の出現記録、JR 八王子駅を含む「八王子 7J」メッシュ内に出現した野鳥記録、イソヒヨドリの繁殖記録、クルミを空中から落とすハシボソガラスの行動、1989 年の 1 年間のヒバリの観察記録等の過去の情報を知りたい場合、エクセルの機能を使って簡単に検索・抽出ができます。

定期カウントで観察したデータを「鳥信」にも報告しなければいけない理由は、貴重な情報を「鳥信データベース」に追加するためです。鳥信に報告がないと得られた貴重な情報が埋もれてしまいます。

Q19　カウント結果を「モニタリング 1000 にも報告する」とあるが、「モニタリング 1000」とは何でしょうか？

A　「モニタリング 1000」とは、環境省の生物多様性センターが運営している重要生態系監視地域モニタリングのためのデータベースです。長期にわたる継続的なモニタリングで得られたデータを分析することにより、生物種の減少など、自然環境の移り変わりをいち早く捉え、迅速かつ適切な保全対策につなげることが目的とされています。カワセミ会の定期カウント結果は 2008 年以降のものが NPO 法人バードリサーチを通じて「モニタリング 1000」のデータベースに登録されています。

Q20　各地域のカウント結果の分析報告会はいつ、どのようにするのですか？強制でしょうか？

A　定期カウント結果の分析は、各月総羽数の集計、総種類数の集計、種類別の年間最高値の算出、出現種類数や出現羽数の年次変動等が主なものです。

集計・分析の方法や報告会の日程等は、幹事会で検討し、お知らせします。担当コースのカウント結果の分析を通してその特徴や年次変化等を把握することや、他のカウントコースについて理解を深めるという意味からも、担当者は分析報告会に参加することが望まれます。

なお、分析報告会での報告は強制するものではありません。

Q21　カウント中に藪に入り野鳥を探す（追い出す）、録音機による呼び寄せなど、野鳥に対する配慮に反する行為がありました。

担当者はどうすればいいのですか？その結果出てきた（確認した）鳥もカウントしていいでしょうか？

A　定期カウントは、自然環境の中にいる野鳥をカウントすることを趣旨としているので、野鳥を追い出すこと、餌や録音機や口笛で野鳥を呼び寄せることはやめましょう。

カウント中に外部の人がこのようなことをしていた場合は、その人に止めるように呼びかけることが望ましいですが、その時の雰囲気や相手の態度等で声をかけ難いこともありますので、ケースバイケースで対処してください。

なお、カウント中に確認した鳥は全てカウントの対象にします。

Q22　実施中に参加者が一般の市民と接触しもめました。担当者はどうすればいいのでしょうか？

A　参加者はカウントに夢中になり、鳥に関心がない人への配慮がおろそかになりがちになり、もめることがあります。担当者は当事者の話をよく聞き、相手には詫びることを忘れないようにします。

何より参加者がマナーを守ることが必要です。　＜参照　マニュアル８＞

Q23　子供を学校に送り出すため、毎回集合時間に遅れます。また、年寄りを見ているので、最後まで参加できないことが多いのですが、それでもカウントに参加できますか？

A　参加、大いに歓迎です。

上記のような諸事情により定期カウントの全行程に参加できなくても、可能な範囲でより多くの人がカウントに参加・協力するということが、何よりも大切なことです。

なお、集合時刻に遅れる場合やカウントの途中で退出する場合等は、担当者に連絡することが肝要です。

Q24　定期カウントに参加した場合、参加費が無料なのは何故でしょうか？

A　八王子・日野カワセミ会規約第 5 条で、探鳥会参加費　1 回 200 円と定めていますが、定期カウントなど調査活動に参加した場合の定めはありません。

定期カウントは、調査活動のひとつで毎月同じ場所を継続して調査し、確認した野鳥の羽数等を報告する必要があります。調査参加者は、担当者とともにこのような責務の一端を担っています。このようなことからカワセミ会では、定期カウント、夏鳥調査等々の調査活動では参加費をいただいておりません。

Q25　野鳥は、飛翔による行動範囲が広く、ある狭いエリア（コース）にカウント時に居るかいないかは、その時の天候、天敵の有無、川遊びや釣り人の有無、草刈りや工事など、一時的な環境の変化により対前月、対前年、他の類似のコースと比較し種や個体数が増減します。このような偶然的な事象に影響にされる野鳥のカウント結果も科学的データといえるのでしょうか？

A　結論は科学的データと言えます。1 回だけとか、数回だけとか、1 年だけとか、数年だけとかのデータでは確かに偶然的な事象に影響にされる割合が高くなります。しかし、カワセミ会の定期カウントは毎月 1 回のペースで 20 年、30 年継続して行われています。この定期カウントは今後もさらに継続されます。このように定期的な調査を長く継続することにより、減少傾向とか増加傾向を統計的に捉えることができます。データを統計的に扱うことによって偶然的な事象に影響にされる割合を小さくできるので、科学的データとして位置づけられます。

長期間定期カウントを継続するにあたりコースを大幅に変更しないこと、担当者が変わっても調査方法を変更しないこと等が重要で、そのために本マニュアルの意義があります。なお、カウント中に知り得た天敵の有無、川遊びや釣り人の有無、草刈りや工事など、一時的な環境の変化などの情報は「特記事項」に必ず記載します。

Q26　野鳥定期カウントの担当者は何種ぐらいの野鳥が識別できればよいですか。

A　当初は 100 種程度を識別できれば充分です。ここでいう識別とは野外で生きている鳥の識別です。カウント時に鳥を捕まえてじっくり観察することはできません。野鳥の姿、声、仕草、飛び方等から一瞬にして鳥を識別する必要があります。日本には 633 種の野鳥が登録されています（2012 年日本鳥学会日本鳥類目録第 7 版）。八王子・日野市内には 201 種の野鳥が確認されています（2006 年八王子・日野カワセミ会：数え上げた浅川流域の野鳥 2）。このため、201 種の野鳥の識別が課題になります。しかし、201 種を全て自力で識別できる必要はありません。1 回の定期カウントで出現する野鳥の種類は 50 種以内です。1 地区当りの年間の出現種類は多い地区でも 70 種程度です。

201 種のうちには、数年に 1 回とか、今までに 1~2 回しか観察されてない種が含ま

れています。毎年出現する可能性のある種は約半分の 100 種程度です。カワセミ会では「浅川の野鳥５４種」という浅川の鳥の見分け方を解説した冊子を出しています。先ず、この 54 種をマスターしてください。この他に 50 種弱を加えた 100 程度を識別できれば充分です。さらなる向上のためには各地の探鳥会に参加して先輩から教えを請うことが大切です。全国の探鳥地を訪れて未だ見ていない鳥に出会うことも楽しみであるとともに識別力を磨く絶好の機会になります。

なお、モズ、ジョウビタキ、ルリビタキ、カモ類など雌雄の区別ができる鳥、オオタカ、ゴイサギのように成鳥と若鳥の区別がつく鳥はその違いが分かるように識別力をつけておくことも大切です。

Q27　どうすれば野鳥の識別力が向上しますか。

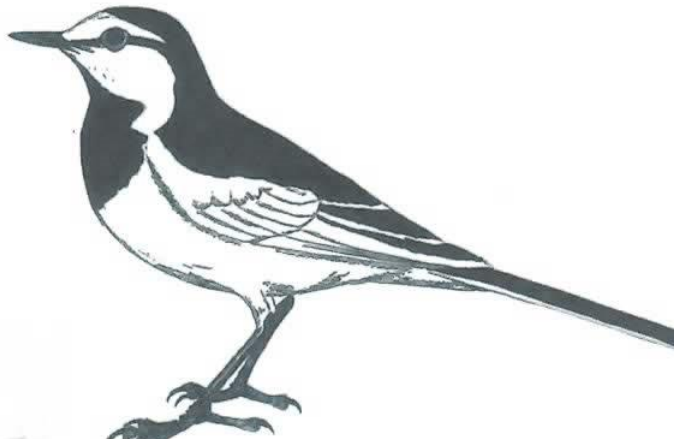
A　野鳥を観察する機会を多くすることが最も有効な方法です。言い方を変えれば「鳥見に出かける場数」を増やすことです。身近な場所に自分のフィールドを持つことや有名な探鳥地に遠征すると実力が格段に上がります。ベテランや先輩から遠慮なく教えを請うことが大切です。図鑑を見るのではなく、読み取る習慣をつけましょう。自信を持って確実に識別できる鳥を持つことが大切で、確実に識別できる鳥と同じか、違うか、違う場合はどこが違うかという見方をします。他の人と教え合う習慣をつけましょう。見た鳥は必ずメモしておきましょう。以下は識別力を向上させるための幾つかの着眼点です。

・野鳥のフィールドマーク（例えはキジバトの首の横の縞模様）
・種別の固有の野鳥の動作（例えはセキレイの仲間は尾を上下に振る）
・種別の固有の野鳥の行動（例えばムクドリは集団で行動することが多い）
・種別の固有の生息環境（例えばウグイスは藪の中にいることが多い）
・種別の固有の季節性（例えはジョウビタキは夏はいない）
・種別の固有の繁殖行動（例えばイカルチドリは丸石河原に営巣）
・野鳥の声（地鳴きとさえずりの違い、聞きなしを覚える）
・似たもの同士の相違点（例えはダイサキ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、クロサギの白色型の違い）
・通称名（例えばマガモが青首と呼ばれる）、英名（例えばアオジは Black-faced Bunting）
・雌雄の違い、成鳥・若鳥の違い
・浅川野鳥カルタを活用

Q28　カウントコースの環境が変わり概要内容がそぐわなくなった場合はどうするのですか？

A　カウント担当者は、コース中に新たに橋が出来た、河川改修により堤防が付け替わった、また、隣接地の環境が大幅に変り、概要の内容にそぐわなくなった時は、会長に連絡してコースを変更し、概要を訂正・更新します。会長は、カワセミ会 HP の定期カウントマニュアルを更新します。

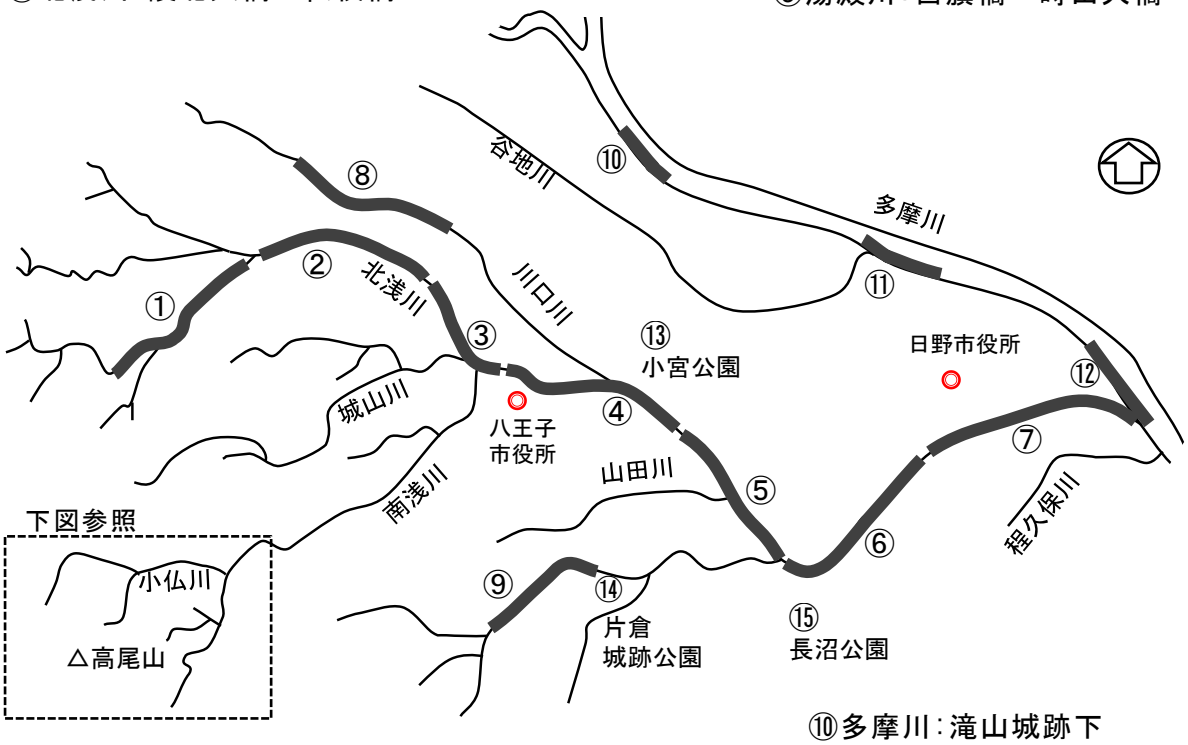
なお、このマニュアルの内容が全面的に実態にそぐわなくなったときに改訂する。



絵；湯原直彦（元会員）

定期カウントコースの位置

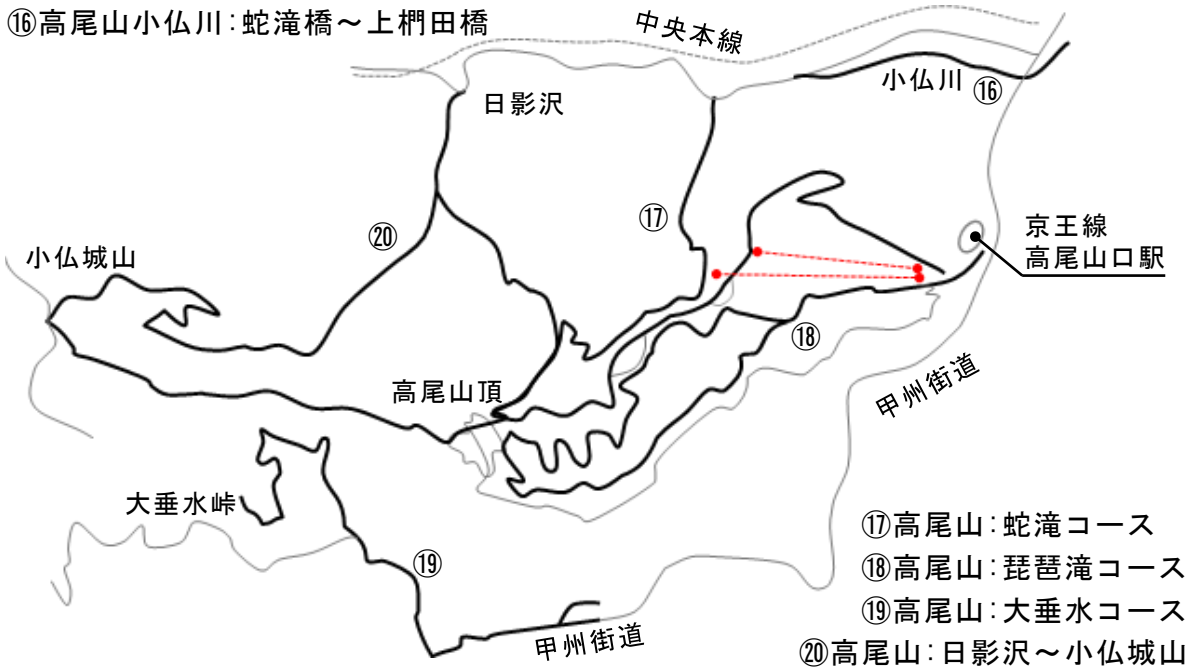
①北浅川：松竹公園西～陵北大橋
②北浅川：陵北大橋～松枝橋
⑧川口川：川口橋～明治橋
⑨湯殿川：白旗橋～時田大橋



③浅川本流：松枝橋～鶴巻橋
④浅川本流：鶴巻橋～大和田橋
⑤浅川本流：大和田橋～長沼橋
⑥浅川本流：長沼橋～一番橋
⑦浅川本流：一番橋～多摩川合流

⑩多摩川：滝山城跡下
⑪多摩川：谷地川合流付近
⑫多摩川：浅川合流付近
⑬小宮公園
⑭片倉城跡公園
⑮長沼公園

⑯高尾山小仏川：蛇滝橋～上椚田橋

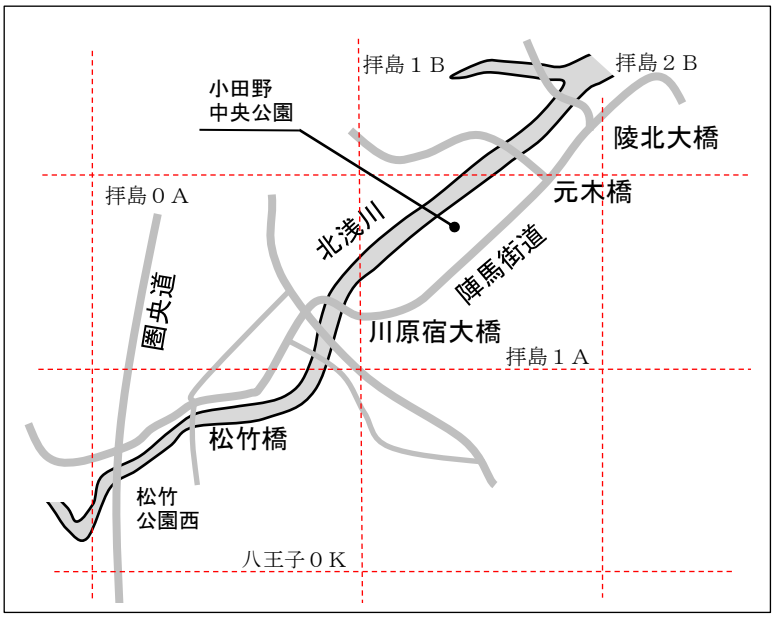


⑰高尾山：蛇滝コース
⑱高尾山：琵琶滝コース
⑲高尾山：大垂水コース
⑳高尾山：日影沢～小仏城山

① 北浅川：松竹公園西～陵北大橋

概要

陵北大橋から松竹公園西までの約 3ｋｍのコースで、全体を通してほぼ平地である。下流域は比較的人家が近いが、進むにしたがって丘陵地が迫り、自然が豊かな環境となる。したがって水辺の鳥だけでなく山野の鳥も観察できる。



特徴・留意点

近年、小田野中央公園沿いのルートが整備されたのに続き、その下流域の元木橋～陵北大橋間も整備されつつある。この整備工事は川岸の立木類を伐採するわけで、そのことが野鳥にどのような影響をもたらすのかは評価が難しいが、現時点では大きな変化があるようには見えない。長い目で見ていく必要がある。

カウントの実際

(１)コ ー ス:カウントは原則、毎月第一土曜日に実施し、陵北大橋から松竹公園西に向かう。

(２)集合場所：陵北大橋下（京王八王子駅、JR 八王子駅北口からバスあり。宝生寺団地入り口で下車。高尾駅北口からバスあり。小田野で下車。）

(３)集合時刻：4 月～10 月は 7：30、11 月～3 月は 8：00。
所要時間は 2 時間～3 時間で午前中に終了。

(４)駐 車 場：ありません。

(５)危険箇所：特にありません。一部車道を横断する所と、車道沿いに歩く所あり。

(６)ト イ レ：小田野中央公園および松竹公園にあります。

(７)観察ポイント

・陵北大橋付近:冬季には左岸側に時々アカハラが見られる。オナガの出現率が高い。立木にオオタカが止まっていたりすることも。

・小田野中央公園には八王子・日野カワセミ会 10 周年記念の山桜の木が 5 本あり、毎年 4 月の月例探鳥の終点になっており、有志で食事会を行なっています。また、この公園には小さな雑木林があり、ここによくイカルが集団で集まります。

・川原宿大橋近くの公園が休憩ポイントになっており、みんなでお菓子をいただきながら鳥談義に花を咲かせます。

・松竹公園付近:定期カウントの終点ですが、ここではしばしばオオタカ、ノスリなどのタカ類が観察できます。また、圏央道の下の草むらではホオジロが毎回のように観察されます。渡りのシーズンにはもちろんサシバやハチクマの姿も。

② 北浅川：陵北大橋～松枝橋

概要

陵北大橋より松枝橋までの３km 弱がカウント対象地域となっています。右岸に遊歩道があり順光観察に有利となるよう下流より上流に向かって行っています。夏の期間は草が生い茂り川面が望めない事もありますが、基本的には水辺から離れないようにルートをとっています。

特徴・留意点

①上壱分方小学校付近の浅川渓谷と呼ばれる流れ、東京天使病院付近に大きな堰など変化に富んだ環境は多くの野鳥との出会いを叶えてくれています。

②厳寒２月の毎年行う当コースでの月例探鳥会には多くの参加者が集い魅力的なコースとなっています。

カウントの実際

(1)コ ー ス：カウントは順光下で観察できるように下流から上流に向かって行います。

(2)集合場所：右岸松枝橋下（四谷並木橋バス停又は楢原町バス停から徒歩約 10 分）

(3)集合時刻：午前 8 時 00 分（変更の場合もあり）、終了予定時刻は 10 時半頃。

(4)駐 車 場：ありません。

(5)危険個所：林内、川面に近いところは足元に小石、枝などがあり、上壱分方小学校付近は護岸に赤土が露出し崩れる可能性もあります。安全上のリスクもありますが、近づかない対処で事故は回避しコンクリート護岸とならないよう現環境を継続して欲しいと願っています。

(6)ト イ レ：中間に位置する元八市民センターが利用可能です。（月曜日休館日）

(7)観察ポイント

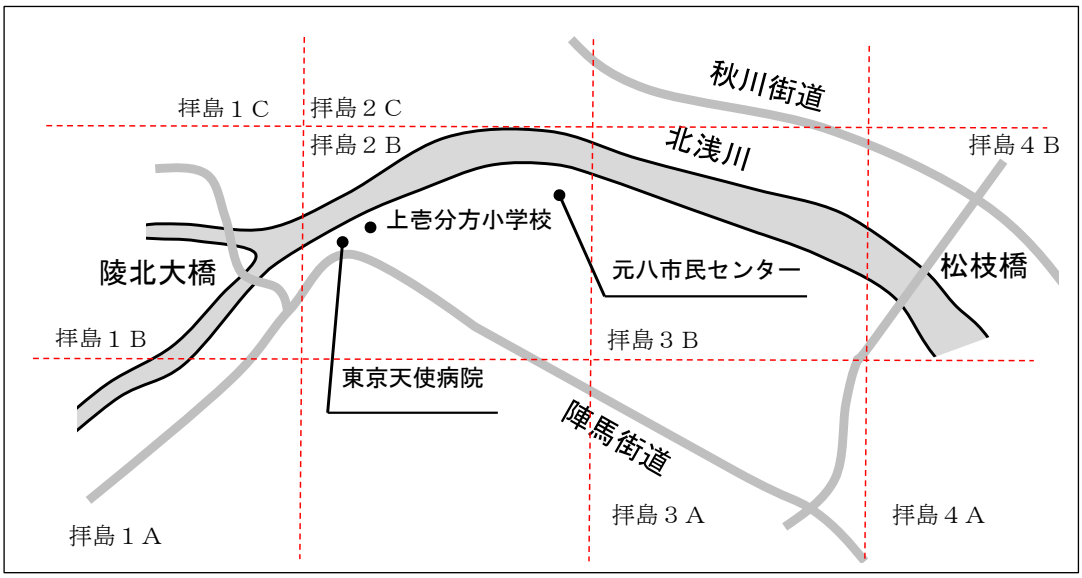
・スタート地点付近での水辺の鳥、アカシヤを主体にした林の鳥、平地から丘陵へと移りゆく中での猛禽類など多くの種類が出現しています。

・松枝橋付近での中洲、川面などイカルチドリ、カワセミ、アオサギ等

・アカシヤを主体にした林内:ではシロハラ、ホオジロ、シジュウカラ、レンジャク等

・コース全体の上空:オオタカ、ノスリ、チョウゲンボウ等

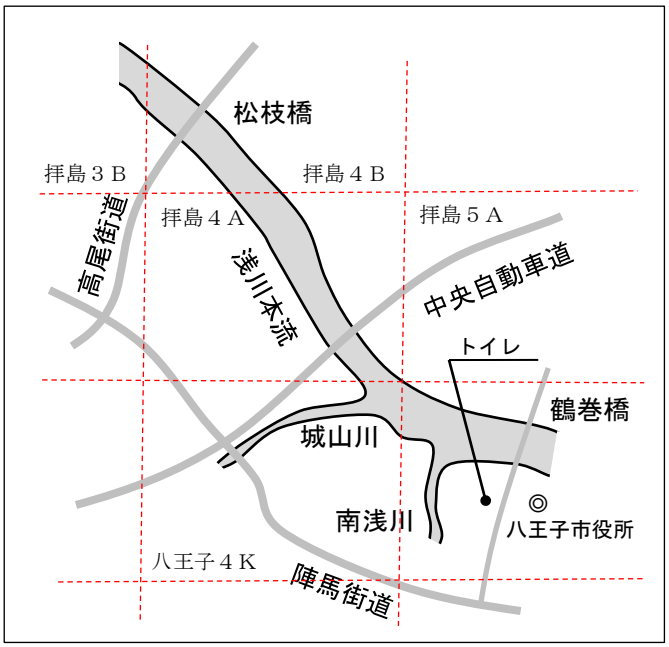
・東京天使病院脇の堰:カイツブリ、バン、クサシギ、カワウ等



③ 浅川本流：松枝橋～鶴巻橋

概要

このコースは、八王子市役所脇の鶴巻橋から高尾街道の松枝（まつえ）橋まで約 2km、全体が開けた区域で、鶴巻橋からは富士山も望むことができる。（頭だけですが）　鶴巻橋付近は浅川の本川であるが、すぐ上流で北浅川と南浅川とが合流しており、更にすぐ上流で城山川とも合流している。中ほどには中央自動車道の高架橋があり、この付近の地層からは、メタセコイアの化石林や、古代象の化石等も発見されている。また右岸・左岸共に違法耕作が多く目に付き、野鳥の生息圏を狭めていると思われる。



特徴・留意事項

①現在松枝橋の架け替え工事途中であるが、この他にも河川改修工事が随時実施されており、調査コースや生息環境が変化することから、出現種との関連等に注意する必要がある。

②夏草の繁茂によるルート変更も強いられる。

カウントの実際

（1）コ ー ス：カウントは、鶴巻橋から、左岸側を上流に向けて行う。

（2）集合場所：鶴巻橋（西八王子駅北口より徒歩 20 分、バス有り）

（3）集合時刻：夏季 6 :30、冬季 7:00、１月は冬鳥一斉調査を兼ねるため 8:00。所要時間は、概ね２時間半～３時間程度

（4）駐 車 場：ありません。

（5）危険箇所：狭い土手を歩くことが多く、ランニングの人や自転車は少ないが、粘土質の岸辺は滑りやすく、転倒したことがある。

（6）ト イ レ：スタート地点の八王子市役所来庁者駐車場脇

（7）観察ポイント

・鶴巻橋付近：橋の上から、キジ、タヒバリ、セキレイ類、チドリ類、サギ類。鶴巻橋を出て、コーヒーまほろば先の空地でコチドリ一家を何度か目撃しており、繁殖していると思われる。

・河川敷の農耕地：モズ、ジョウビタキ等

・中央高速道高架橋下：イワツバメ、ヒメアマツバメ等

・松枝橋付近：カシラダカ、ベニマシコ等

（8）そ の 他

・帰りの交通としては、松枝橋東側に、はちバスの停留所があるが本数は少ない。

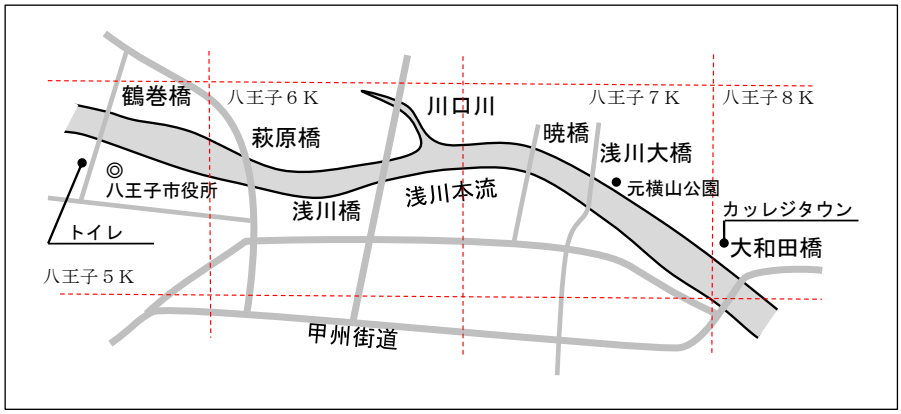
・観察会協力：八王子市市史編さん室主催の“浅川の野鳥観察会”が何回か開催されている。

④ 浅川本流：鶴巻橋～大和田橋

概要

このコースは、北浅川と南浅川合流地のすぐ下流にかかる鶴巻橋から大和田橋(国道 20 号)までの 3.1Km である。この間に上流から萩原橋、浅川橋(国道 16 号)、暁橋、浅川大橋がある。

特徴・留意点



①八王子市の中心である市街地部分を流れ、川の両岸に住宅が迫っている。

②河川敷の開発が活発で、３面のグラウンド、右岸側にサイクリングロード（2004 年）、左岸側に遊歩道(2013 年)などが作られている。

③堤防工事、河床工事、堰の工事などの工事が続き、河相が変わってきている。川の直線化でよどみが少なくなり、河原も減少、ワンドも一つ消滅した。

④6.5km の一周コースで約４時間（途中のレストランで食事することもある）。

⑤堤防、サイクリングロード、遊歩道を歩くが、一部河原も歩く。

⑥京王八王子駅、JR 八王子駅、いくつかのバスルートとのアクセスが良いため場合によっては途中参加や、途中離脱も可能である。

カウントの実際

（１）コ ー ス：暁橋上流の集合場所から、右岸を上流方向に進み、鶴巻橋を渡り左岸を大和田橋まで進む。大和田橋を渡り右岸を上流方向に進む。

（２）集合場所：暁橋上流右岸グラウンドの下流側。

（３）集合時刻：午前 8 時 00 分（年間通して同じ）。終了予定時間は 12 時 30 分頃。

（４）駐 車 場：ありません。

（５）危険個所：サイクリングロードでは、接触事故に注意する。信号のない道路（暁橋左岸側）は、両方から車が来るので２人以上で確認する。川に削られた崖上の場所は崖が崩れる危険があるため近づかない。

（６）ト イ レ：市役所のトイレ、元横山公園のトイレ、カレッジタウンのトイレのほか、小さな公園２カ所にも簡易トイレがある。

（７）観察ポイント（2013 年時点）

・浅川橋下流の堰：水鳥が多い（サギ類、イソシギ、カワセミ、カルガモやコガモ等）

・萩原橋付近のワンド：アオジ、オオヨシキリ等

・鶴巻橋・萩原橋付近の河原：イカルチドリが営巣する

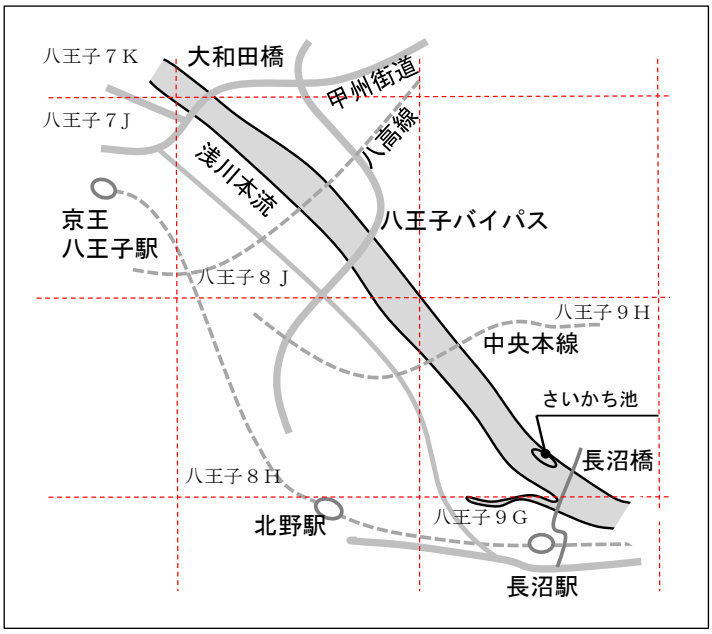
・鶴巻橋付近：市役所にチョウゲンボウ、オオヨシキリ等、冬の中州にはオオジュリンやベニマシコが見られることも

・浅川大橋・大和田橋：イワツバメのコロニー

・水管橋下流：セッカ、ホオジロ、カシラダカ、ベニマシコ

・水管橋上：アオサギ、ダイサギ、コサギ、などの他トビやチョウゲンボウも止まる

⑤ 浅川本流：大和田橋～長沼橋



概要

このコースは、浅川本流の大和田橋から長沼橋の区間を対象としており、浅川の中流部にあたる。これら２つの橋の間は直線距離で約 1.5km である。行政区域としては、大部分が八王子市に属するが、左岸の新浅川橋の南側から長沼橋の間は日野市西平山に属する。

コースの特徴・留意点

①この定期カウントコースは比較的川幅が広く、また砂地、砂礫地、ヨシ原、河畔林、池など多様な環境に恵まれていることから鳥種が多く、これまでに 100 種（移入種含む）を超える鳥が観察されている。定期カウントでは 20 種台後半から 40 種程度の鳥が観察されている。鳥種数は冬場に多く夏場に少ない傾向がある。長沼橋上流側左岸湿地（さいかち池）は、このコースでの最大のポイントで、多くの鳥が観察される。また、大和田橋下はイワツバメの集団営巣地として知られている。

②1 月は大和田橋⇒長沼橋で行われる冬鳥一斉調査の結果をもって、定期カウントに代えている。（コース順は異なる：大和田橋集合）この時はカウント参加者が複数となる。

③例年 10 月には長沼橋⇒大和田橋で公開探鳥会が開催されている。（長沼駅集合）

３．カウントの実際

(1) コ ー ス：定期カウントの始点は浅川・湯殿川合流点で、右岸を上流の大和田橋まで行き、左岸を長沼橋まで戻る。終点は長沼橋北詰としている。概ね AM7 時半前後にスタートし、M11 時前に終了する。なおカウントは、基本的に右岸での観察数をもって行うが、左岸では、右岸で観察されなかった種を追加する。また右岸で観察されたが、左岸の方が数が多い場合はその種は左岸の数をもって「カウント数」としている。

(2) 集合場所等：現在は、担当者都合により単独でカウント実施しているため定めていない。

(3) 駐 車 場：長沼橋南詰近くにコインパーキングがある。

(4) 危険個所：ほとんど危険なところはないが、最近は自転車を楽しむ人も多く、右岸の土手道は鳥だけでなく周囲にも注意を払う必要がある。また右岸の大和田橋から新浅川橋までは車も通行可能（日曜日の 9 時以降は車は通行禁止）であり一層の注意が必要である。

(5) ト イ レ：右岸の新浅川橋近くのグラウンド隅にトイレがある。

(6) 観察ポイント：

・河原、中州（全域）：シギチ、キジなど。

・ヨシ原（全域）：ホオジロ、アオジ、セッカなど

・さいかち池及びその北端の茂み：カモ類、カワセミ、バン、オオバン、カイツブリ、ゴイサギなど

・水管橋：アーチ上にサギ類、カワウ、トビなど

・大和田橋付近：橋下にイワツバメが集団営巣する。（4 月～7 月くらい）

浅川本流：大和田橋～長沼橋

【右岸：浅川湯殿川合流⇒大和田橋】

始点は浅川･湯殿川合流点である｡その場でまず長沼橋下からその上流の河原を観察する。その後浅川右岸の土手道を上流側に歩く。歩き出してしばらくは、流れが左岸寄りにあるため、河原の草地の観察が主である。コース全域にわたり草地ではホオジロが見られ、夏はセッカが舞い、渡りのシーズンには、ノビタキが姿を見せることもある。キジの声や姿もよく観察される

中央線鉄橋をくぐると、水管橋のアーチがよく見える。ここにはアオサギやカワウ、時にトビなどが羽を休めている。また、水管橋近くの建物上にはドバトが多い。水管橋をくぐると左手から山田川が合流しており、下中田橋で山田川を渡る。新浅川橋の手前左側のグラウンド隅にトイレがあり、公開探鳥会ではここを休憩場所としている。

新浅川橋から大和田橋までは自動車も走る（日曜 AM9 以降除く）ため、できるだけ道の端を歩く。この付近は流れも近く、水辺にシギチ、セキレイ類なども見られる。

八高線踏切手前左側はあったかホールの敷地であり､緑が多い｡八高線踏切を渡って 250m ほどで土手道から河原に降り、川縁の護岸を歩く。この辺りの水際は 5 月、8 月には渡り途中のキアシシギが見られることがある。そのまま護岸上を歩き大和田橋に至る。大和田橋付近では 4 月～7 月頃のシーズンにはイワツバメが多く見られる。大和田橋下ではイワツバメが集団で営巣し、水辺では巣の材料となる泥を採る姿も観察される。

【左岸：大和田橋⇒長沼橋】

大和田橋で左岸に渡る。左岸はしばらく草地での観察が主となる。土手を 500m 弱歩く広場に突き当たる。土手道を離れ広場の中を歩く。広場の南端の土手沿いに踏み跡がついており、土手下沿いに八高線鉄橋をくぐる。その後左手の土手に上がるが、ここは階段がないため、滑らないように注意する。ここからはしばらく土手上の道を歩く。ここは 200m ほど桜の木が植えられており、シーズンには桜の花の下を歩く。

そのまま新浅川橋、水管橋をくぐるとやがて土手道は突き当りになる。突き当りの手前右側は広いヨシ原となっている。また川の中ほどに小さな林があり、毎年カラスが営巣している。突き当りの右側の階段を下り、踏み跡をたどって中央線鉄橋をくぐる。再び左手の階段を上って土手道に出る。ここは河原がよく見渡せるのでシギチ等に注意する。

土手道に上ってから 250m ほど先の左側に、ニセアカシアの多い河畔林がある。河畔林先に細長い池があり、これがいわゆる「さいかち池」である。この池の南側（長沼橋側）には、さいかちの木がある。さいかち池及びその周辺は、カワセミ会の「サンクチュアリ」ともなっており、貴重な場所である。夏にはバン、カイツブリの繁殖が確認されており、オオバン、クイナの出現記録もある。冬にはコガモが 100 羽近く越冬し、アメリカコガモも記録されている。さいかち池北端の茂みでは幼鳥を含むゴイサギが多く観察され、アリスイも時折姿を見せる。カワセミはここの常連である。

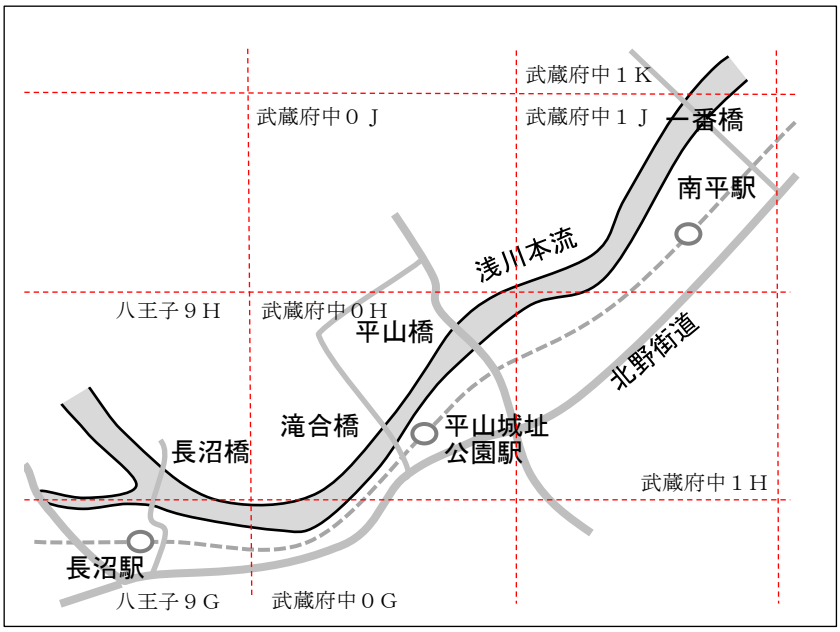
さいかち池では釣りをする人もおり、池の中の立木には釣り糸やルアーなどが絡まってるところもある。野鳥への影響が懸念されるところである。終点は長沼橋北詰である。

⑥　浅川本流：長沼橋～一番橋

概要

このコースは、浅川下流域の出発地点である。八王子市の長沼橋・滝合橋・平山橋を経て、日野市の一番橋まで 3.5 ㎞の区間で､行政区域としては八王子市から日野市にまたがっている。平山橋と一番橋の間で一番橋にごく近い右岸側の湧水は、その量が多いことで知られている。

この区間では平成１４年の長沼橋下流側の堰を崩してブロックを並べるタイプに変更する河川工事に続いて、平山橋下流側の堰のブロック積み直し工事、西平山河原の河川工事、滝合橋上流側の河川工事と､河川工事が集中した。その結果、長沼橋と滝合橋の間右岸側に一ヶ所と左岸側に二ヶ所にあった湧水が、川底工事の影響で消えてしまった。また、河川の底に生息していた藻の類がはぎ取られ、冬季のカモ類飛来数は少なくなってしまった。



特徴・留意事項

①長沼橋からの右岸は、途中で行き止まりになるため、水門までの往復探鳥になりますが、小鳥が多く見られるのでしっかり確認したい。

②長沼橋からの左岸堤防を前進すると滝合橋まで探鳥し、ここからは滝合橋を渡って、平山橋まで右岸側を探鳥する。平山橋を渡りおえる前に上流側の堰もチェックしておきたい。

③平山橋から一番橋までは右岸側と左岸側の両方の探鳥ルートがあるが、両方共に河原のグランドを超えた向こうに河川があるので、川面のチェックにも気を付けたい。

カウントの実際

（1）コ ー ス：カウントは長沼橋から下流側に向けて行っているが、太陽が低い冬季には一番橋から上流側に向かってカウントをしている。

（2）集合場所：長沼橋（長沼駅から徒歩約５分）。冬鳥一斉調査では京王線南平駅前の空き地。

（3）集合時刻：午前８時。終了時刻は 11 時半頃。

（4）駐 車 場：ありません。

（5）危険箇所：堤防上からの調査のため特にないが、他の堤防利用者（犬の散歩やジョギング者）との接触事故に注意が必要である。

（6）ト イ レ：長沼駅と平山城址公園駅と南平駅のトイレを借りる。

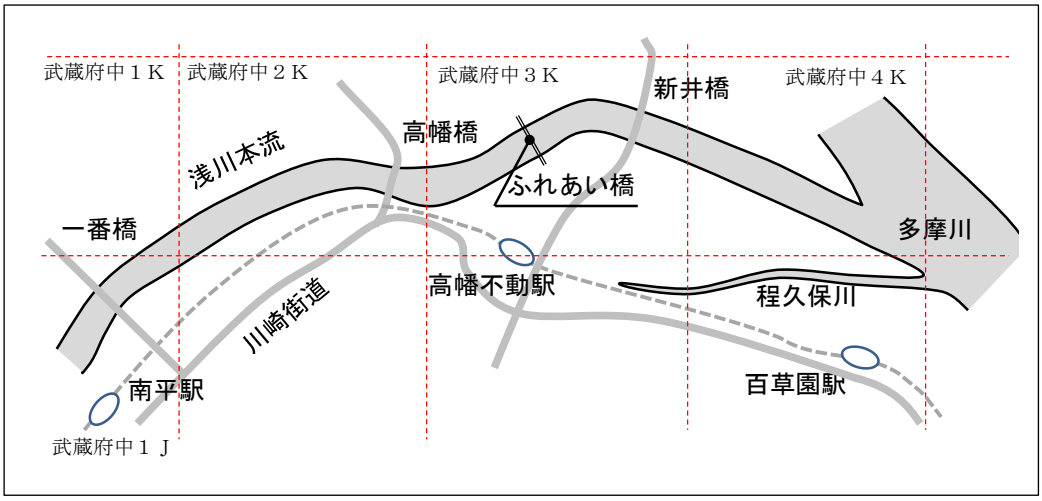
（7）観察ポイント

・長沼橋の下流側右岸 400mの水門付近の小鳥、滝合橋下流側の草地や中州、平山橋下流側の草地など。長沼橋上空と平山橋上空ではタカのチェック。

⑦　浅川本流：一番橋～多摩川合流

概要

このコースは、浅川が多摩川と合流する地点から上流の一番橋までの約 3Km の区域で全域が日野市内である。その間にモノレールと併用の新井橋、歩行者専用の吊り橋「ふれあい橋」そして高幡橋の 3 本の橋が架けられている。周りの土地利用は、大半が住宅地で、所々に小公園、学校、神社、スポーツ施設や清掃工場等の施設が川岸に点在する。これらの敷地の樹木と河川敷の緑地が小さな回廊となり調査地を魅力あるものにしている。



特徴・留意事項

①浅川の最下流部のため川幅が広く、アシなど植物が伸びるとカウントが難しくなる。

②調査地が人口密集地に隣接しているため、散歩、ランニングや自転車など堤防利用者が多く、堤防利用のマナーや事故防止に留意する必要がある。

③この調査地の毎年 1 月のカウントは、冬鳥一斉調査結果をカウントに充てているため、1 月は調査地が 2 分割され、調査担当者も 2 月から 12 月の例月とは異なる。

カウントの実際

（1）コ ー ス：実際のカウントは上流の一番橋から原則右岸堤防上を下流（多摩川合流）に向けて行う。片側のみで、対岸は時間の関係で省略している。（ふれあい橋から新井橋の間は右岸。）

（2）集合場所：一番橋（京王線南平駅から徒歩約 10 分）

（3）解散場所：浅川・多摩川・程久保川の合流部付近、（京王線百草園駅まで徒歩 7 分位）

（4）集合時刻：午前 8 時 00 分（年間を通して同じ）、終了予定時刻は 12 時頃。

（5）駐 車 場：ありません。

（6）危険個所：堤防上からの調査のため特にないが、他の堤防利用者との接触事故に注意が必要である。

（7）ト イ レ:新井橋左岸の日野市東部会館を休憩を兼ねて借りている。（月曜日休館日）

（8）観察ポイント

・河川改修工事が毎年のように行われるので、川の流れや環境が変わり観察ポイントも変わる。

・一番橋下流数百メートルの草地、中洲。

・日野市民プール前付近、ふれあい橋及び新井橋付近の草地、川原。

・浅川・多摩川の合流部、草地、川原など。

⑧　川口川：川口橋～明治橋

概要

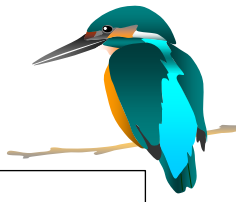
このコースは、川口川の中間に位置した約３ｋｍの区域で川口町から犬目町を流れている川口川に沿った所である。最近住宅化が進み竹林や雑木林が次々と姿を消し野鳥にとって住みにくい所となりつつある。河川改修工事の計画が実行に移される運びとなっていて野鳥にとっての影響が心配される。

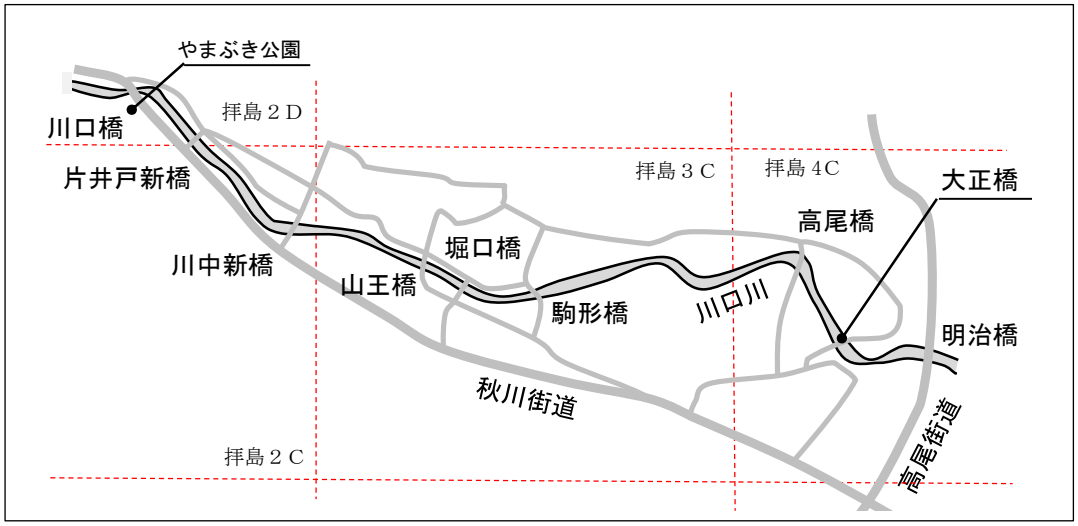
特徴・留意事項

①大雨の後は短期間水が流れるが、晴天が続くとすぐに干上がり植物が生い茂ってしまう。
②川口橋から駒形橋までは常時水は流れているが流れは細い。川幅は 20m 程で両岸が歩け、適宜二手に分かれて情報を伝え合ってカウントを進めている。
③堤防は散歩の利用者は多いが好意的であり、自転車の通行はあるがほとんどの所は車の通行はできずゆっくりと調査できる。調査日は原則として毎月の第一日曜日であるが、１月は冬鳥一斉調査日に合わせている。

カウントの実際

（1）コ ー ス：カウントは明治橋から上流の川口橋に向けて行う。
（2）集合場所：明治橋
（3）集合時刻：12 月～３月は午前８時。４月～11 月は午前７時。所要時間は２時間半前後。
（4）駐 車 場：ありません。
（5）危険場所：堤防上からの調査のため特にないが、他の堤防利用者（特に自転車）との接触事故に注意が必要である。
（6）ト イ レ：観音橋上流右岸「川口中部まちの広場」、川口橋右岸「やまぶき公園」
（7）観察ポイント
・駒形橋付近：アオジ、モズ、オナガ、ガビチョウ、ウグイス、ツグミ等
・川中新橋付近：アオサギ、カルガモ、カワセミ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、キセキレイ、コサギ等
・片井戸新橋付近：ダイサギ、アオサギ、コサギ等
・大正橋付近：シジュウカラ、アオジ、メジロ、ホオジロ等
（8）鳥合わせの場所：川口橋右岸を入った「やまぶき公園」

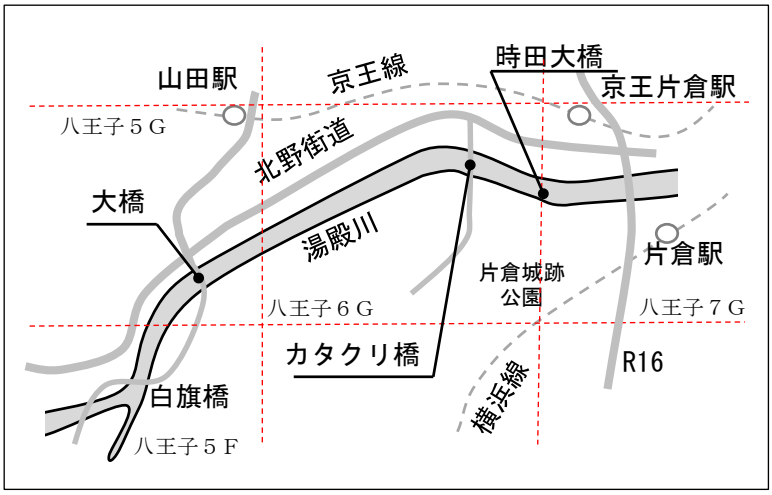




⑨　湯殿川：白旗橋～時田大橋

概要

湯殿川は浅川の支流で、八王子市館町にある拓殖大学付近の山を源流としている。総延長は約 11ｋｍ、京王線長沼駅の北で浅川に合流する。近年、コンクリート化や直線化等の河川改修が行われ、流域の住宅開発も進められているが、小規模ながら水田、畑、雑木林等が散見され、まだのどかな田園地帯の面影が残されている。



特徴・留意点

①川幅は約 20m、水の流れ幅は 10m前後、水深も浅い河川である。両岸に高さ約１ｍの金網フェンスが設置されている。

②水辺や中洲に植物が繁茂している所も少なからずあり、流域の自然環境と一体となって鳥たちに貴重な生息場所を提供している。川幅が狭いだけに、近い距離で水辺の鳥を観察することができ、地域の人たちにとっても野鳥に親しむ格好の場となっている。

③遊歩道の舗装や植栽等年々整備されている。散歩や自転車の人も多く、マナーや事故防止に留意する必要がある。

④カタクリ橋はみなみ野の開発に伴い、交通量が増えている。横断の際は、信号機付横断歩道を渡るようにしたい。

⑤冬鳥一斉調査は、毎月の定期カウントと同様に行うので、その結果は１月定期カウントとして扱っている。

カウントの実際

（1）コ　－　ス：時田大橋から湯殿川右岸遊歩道を上流に向けて白幡橋まで、約 2.2km。この間の橋５つ（カタクリ橋、稲荷橋、殿田橋、釜土橋、大橋）

（2）集合場所：片倉城跡公園池の前。ここから時田大橋まで湯殿川沿いに５分ほど歩く。

（3）集合時刻：午前８時 00 分（年間を通して同じ）終了時刻 11 時頃（帰りは、白幡橋から湯殿川左岸遊歩道を下流に向けて片倉城跡公園方面へ）

（4）駐　車　場：片倉城跡公園の駐車場。但し、開場 9：00～17：00

（5）ト　イ　レ：片倉城跡公園のトイレ

（6）危険箇所：特にないが、カタクリ橋の横断、遊歩道の通行人や自転車に注意。

（7）観察ポイント（平成 25 年度の記録から）

・時田大橋から稲荷橋：カルガモ（親子も）、アオジ。

・稲荷橋から釜土橋：イワツバメ、コガモ、アオサギ、イソシギ、カルガモ（夏季、左岸水田に多い）、コチドリ（左岸水田）、キジ（右岸畑、草原）、カワセミ。

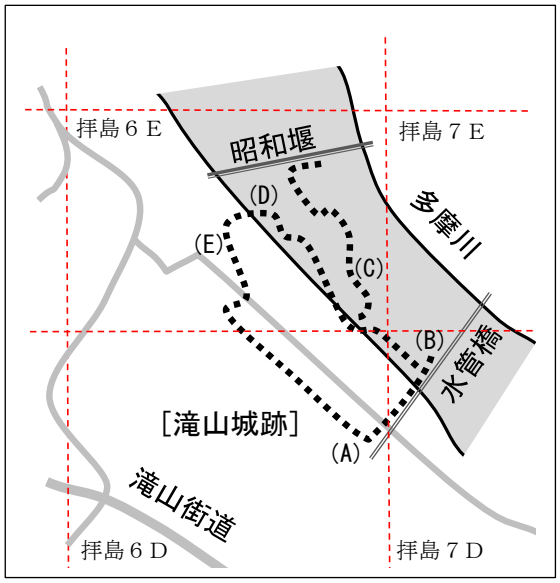
・釜土橋から白幡橋：モズ（右岸畑）、カイツブリ、コガモ。

・釜土橋の上流右岸側の荒地：アオジ、カワラヒワ。

⑩　多摩川：滝山城跡下

概要

このコースは、多摩川本流のうち昭和堰から水管橋、拝島橋上流に至る流れに沿って約 1.5 km、その右岸と滝山城跡のある滝山丘陵との間に広がる平坦地で、八王子市と昭島市にまたがる。調査地の中心には八王子市の滝川運動公園があり、その北西に高月浄水場につながる水田や畑が広がる。その西端、滝山丘陵の麓には農業用水路が流れ、都内では貴重な里山の風景を形作っている。昭和堰には魚道も設けられ季節には釣り人も多く、上部には広く水面が広がる。そうした地域と河川敷の緑地が地理的にも季節的にも、調査地を変化のあるものにしている。



特徴・留意事項

①夏季にはオオブタクサやササ類が繁茂するわりに人通りがないため、藪こぎを余儀なくされる。そこでは蜂やマムシなどにも注意が必要である。

②多摩川の水量によって本来の河川敷が歩けなくなることや、大雨によって地形が変わることもしばしばであるので、ルートを堤防沿いに変更するなど柔軟な対応が必要である。

③河川敷には「住民」や様々な服装の方がおられるので、双眼鏡を持った歩行には気を遣う場合がある。

④運動公園の駐車場を利用させていただくこと、農地を通らせていただくこともあるので、マナーやコミュニケーションにも留意する必要がある。

カウントの実際

（1）コ　ー　ス：実際のカウントはまず、(A) 滝山丘陵を観察してから水管橋沿いに右岸に出て (B) 拝島橋方面をカウント、折り返して (C) 右岸の林の中を上流に向かい、途中から川原に出て可能ならそのまま右岸河川敷を昭和堰まで上る。(D) 昭和堰付近と上部水面をカウントして、高月方面の堤防に戻り畑地を経て (E) 滝山丘陵下へ、用水路沿いに滝川運動公園の駐車場に戻る。

（2）集合場所：滝川運動公園（水管橋下）駐車場（拝島橋バス停から徒歩約 10 分）

（3）集合時刻：午前 9 時 00 分（年間を通して同じ）、終了予定時間は 12 時頃。

（4）駐　車　場：滝川運動公園の駐車場を利用（8 時 30 分開場）

（5）危険個所：昭和堰付近の段差や滑りやすい箇所、藪こぎ中の切り傷、虫害などに注意する必要がある。運動公園脇の道路を横断する際には特に車に注意が必要である。

（6）ト　イ　レ：滝川運動公園管理棟周辺で利用可能。

（7）観察ポイント

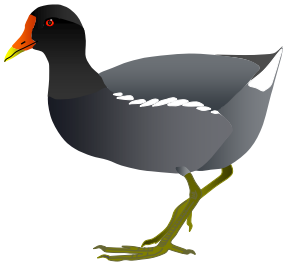
大雨の影響や工事で、毎年のように川の流れや環境が変わり観察ポイントも変わりますが、通常以下のような野鳥がよく出現しています。

・滝山丘陵～多摩川の上空：オオタカ、ノスリ、トビ等

・多摩川本流（水管橋～昭和堰下）：カワウ、サギ類、セキレイ類、カワセミ、セッカ等（季節によってはノビタキ、シギ類などにも注意）。

・右岸の林・堤防周辺：ウグイス、ホオジロ、カワラヒワ等（時にはレンジャク類も）。

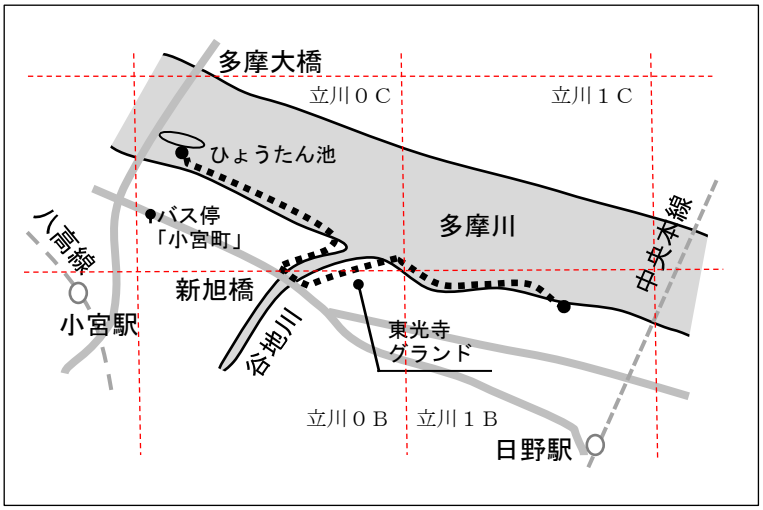
・昭和堰周辺：サギ類、カルガモ、オオバン、カワセミ等（季節によってササゴイ、ベニマシコ、オオジュリン、ハヤブサなどにも注意）。



⑪　多摩川：谷地川合流付近

概要

このコースは多摩川に掛かる中央線鉄橋の上流側から、多摩大橋下流側の多摩川河川敷内にある通称「ひょうたん池」と呼ばれる池までの日野市、八王子市、昭島市の三市にまたがります。中央線鉄橋から多摩川と谷地川の合流部までの数百メートル、そして谷地川浄化施設付近の僅かな距離しか川の流れは見えず、大半は河川林や葦や笹の生い茂る広い河川敷を土手の上から観察する事になる。その為、所謂水辺の鳥の他、林や森に住む鳥の観察例も多い。またその広い河川敷を狩り場としている猛禽類もよく観察されている。



特徴・留意事項

①日野駅から集合地点までは約1km あり、観察コースが約3km、帰路は解散地点から日野駅などに向かうバス停まで数百 m、八高線の小宮駅まで1km 強である。

②観察コースは自転車や散歩の人などは比較的少ないが、月例探鳥会などの大人数では土手の上を観察者で埋め尽くさない配慮が必要である。

③土手の上を歩くコースなので夏場は日照り対策、冬場は北や西の強い風に対する対策が必要である。

④観察出来る鳥の種類は 30 種前後で夏に少なく冬から春先では 40 種を数えることがある。

カウントの実際

(1)コ　ー　ス：右岸を上流に向かい、谷地川の新旭橋を渡って谷地川の左岸を回り込んでから更に多摩川の右岸の土手を歩く。

(2)集合場所：日野駅から連れ立ってくる方が多いが、中央線鉄橋上流側の土手に集合している。解散地点迄の所要時間は 3 時間弱である。

(3)集合時刻：8:00、解散は土手脇にある公園で鳥合わせを行い、概ね 11:00 頃になる。

(4)駐　車　場：ありません。

(5)危険箇所：コース中程の「東光寺グラウンド」が、近年日野市が硬球を用いた野球専用グラウンドになったので、グラウンドが使われていることが多い土日は、時折土手の上まで飛んでくる硬球があり、格別の注意が必要である。自転車や散歩の人などは比較的少ないが、月例探鳥会などの大人数では土手の上を観察者で埋め尽くさない配慮が必要である。

(6)ト　イ　レ：上述の東光寺グラウウンド内中央に水飲み場と共に有るが、土日は硬球を用いた野球の練習をしていることが多く、其処に近づくのに危険を伴うことがある。

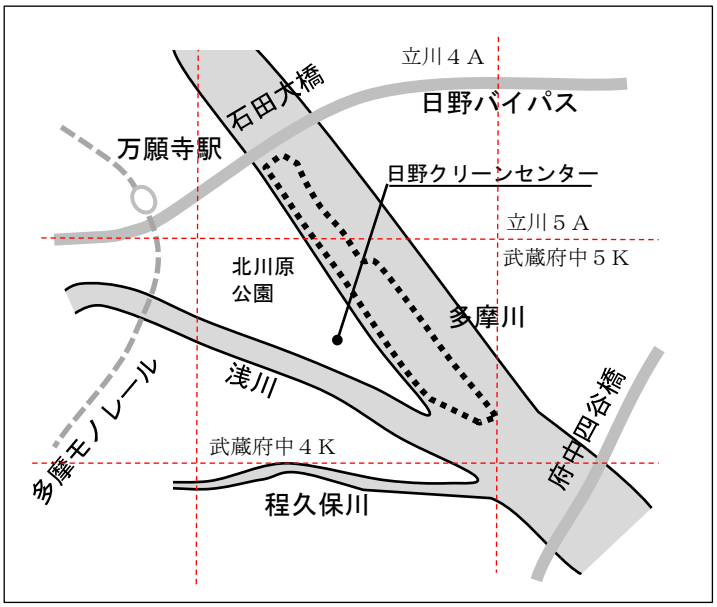
(7)観察ポイント

・中央線鉄橋の上流側で多摩川本流が広く見渡せ、水辺の鳥は大半このスタート地点で見られるので、少し時間を掛けてでも丹念に鳥を探してみたい。バンなどが観察出来る通称ひょうたん池は、近年その面積が急激に減少していて、近い将来消滅する懸念がある。

⑫ 多摩川：浅川合流付近

概要

本調査区域は、多摩川が浅川と合流する地点から多摩川の上流右岸、石田大橋までの区間、延長 1,400m幅員 250m、面積 35ha の河川敷です。多摩都市モノレール万願寺駅より徒歩 5 分程度です。



特徴・留意点

①この区域は、多摩川河口から 38ｋｍの位置になります。オギなどの群落の中にハリエンジュ林やクルミなどの高木が点在します。

②多摩川水系河川整備計画（国土交通省）によると、生態学的な観点から動物や植物などの生息生育地として特に保全する必要があると認められた区域で、生態系保持空間として位置付けがされています。

③多摩川と浅川の間に三面張りの根川が流れ、クリーンセンターまでは道路が整備され、道路と並行して堤体に歩行者とサイクリング用の通路が整備されています。多摩川の流れは遠く通路からは見ることはできません。

④堤体の通路はサイクリンや散歩される方が多く注意が必要です。春は通路沿いのサクラが咲き誇り花見目的の市民も多数見かけます。

カウントの実際

(1)コ ー ス: カウントの範囲は根川から多摩川までの範囲とし、石田大橋下のサイクリング通路から最下流側までサイクリング通路を歩き。終点から河川敷きに降り上流側へと戻ります。歩行距離約 3km、２時間程度です。

(2)集合場所等：特に定めてなく担当が都合の付く日で実施しています（月の前半 8 時頃）。

(3)駐 車 場：ありません。

(4)危険個所：堤体の通路は多くの人が利用しています、特に自転車との接触に注意が必要。また、夏場の河川敷きは道を見失うほどの雑草が生い茂り迷うこともあります。

(5)ト イ レ：北川原公園（グランド）土・日・祭日の雨天は閉園、４月から 9 月は 9 時～17 時、10 月から 3 月は 9 時～16 時）

(6)観察ポイント

・日野クリーンセンター前の湧水池には、バン、カイツブリが繁殖しカワセミやアオサギなどが見られます。

・桜並木にはコムクドリが立ち寄ることがあります。

・桜並木下の水路(根川)ではハクセキレイ、キセキレイ、メジロが良く見られます。

・下流の樹木には、オオタカやノスリが羽を休めている姿を見ることがあります。

⑬　小宮公園

概要

小宮公園は、ＪＲ八王子駅の北方 1.8km にあり、浅川北岸の加住丘陵に作られた都立公園で、広さ約 25 万m^2である。公園内は、コナラ、クヌギなどで雑木林を形成し、中央部は低く周辺は小高くなっていて 30m ほどの高低差がある。西側にはお花畑、北側には芝生の広場があり、中央低部には小さな流れがあり、散策用の木道が伸びている。常時、コゲラ、シジュウカラ、エナガ、ヤマガラなどが見られ、時季によっては、珍しい鳥が見られることもある。

特徴・留意点

①春・夏は木々の葉が茂り、下草が伸びるため鳥が見難くなり、鳴き声を頼りにカウントすることが多い。
②急坂もあり滑るので雨後は注意。散歩する人が多いので、妨げにならないように。
③車で来る場合は、下の駐車場は 9 時開場なので、上の駐車場を利用すること。
④カウント結果は、公園事務所にもメールで報告する。

カウントの実際

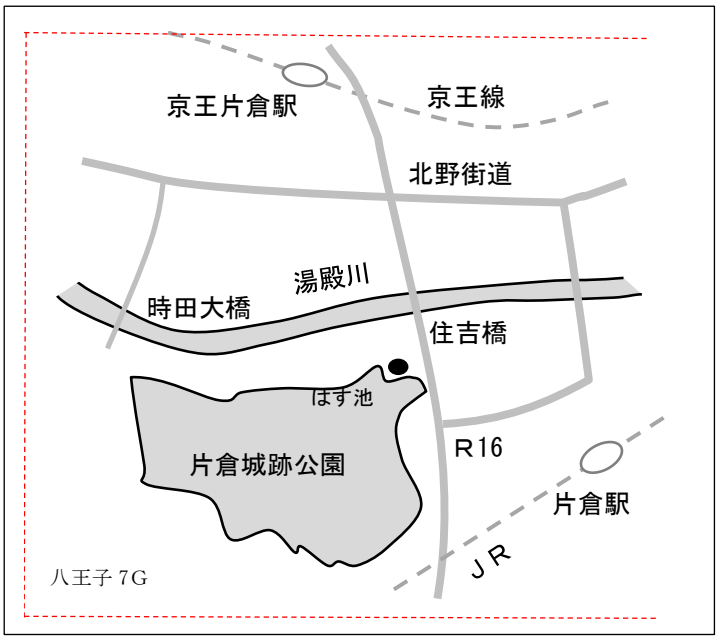
(1)コ　ー　ス：雑木林ホール→けやきの小道→さんこうちょうの小道→ひよどり山→ひばりの小道→おながの小道→しじゅうからの小道→雑木林ホール
(2)集合場所：雑木林ホール前
(3)集合時刻：8 時 30 分。終了時刻は 11 時 30 分頃。
(4)駐　車　場：公園内 2 か所あり。但し、下の駐車場は 9 時開場。
(5)危険個所：特に、危険な個所はないが、未舗装の坂道が多いので滑るところがある。
(6)ト　イ　レ：公園内に 2 か所。
(7)観察ポイント
・雑木林ホール周辺：シジュウカラ、キジバト、ヤマガラ、エナガ。
・けやきの小道：スズメ、ムクドリ、モズ、コジュケイ、キジ。
・ひよどりの小道：キビタキ、ルリビタキ、コサメビタキ、ウグイス、ガビチョウ。
・ひよどり山：カワラヒワ、カシラダカ、ジョウビタキ、オオタカが飛ぶこともある。
・ひばりの小道：シロハラ、シメ、ハクセキレイ、キジバト。
・かわせみの小道：レンジャク、ミヤマホオジロ、ルリビタキ、コゲラ。
・弁天池：カルガモ、カワセミ。

拝島７Ａ（公園内）
トイレ
ひよどり山
ひよどり山中学校
おかめの小道
急坂（上）
さんこうちょうの小道
うぐいすの小道
しげらの小道
ほおじろの小道
ひばりの小道
かわせみの小道
急坂（下）
急坂（下）
つつじの小道
ひよどりの小道
しじゅうからの小道
かわせみの小道
おながの小道
ここも必ず
チェック
けやきの小道
大善寺
大谷弁天池
雑木林ホール
国道16号バイパス→
つつじの小道
トイレ
集合場所
上の駐車場
やまぶきの小道
下の駐車場
（9 時開場）
ひよどり

⑭ 片倉城跡公園

概要

このコースは室町時代に築城された片倉城の跡の面影を残している。入口付近には「はす沼」があり、ここからまっすぐに進んで急な階段を上ると住吉神社、さらにその上には本丸跡と二の丸跡を利用した芝生の広場がある。広場の西側は畑、北側の斜面は雑木林となっている。「はす沼」の西側の林の中には湧水があり、「片倉沢」や「奥の沢」と呼ばれる小さな流れを作っていて、それを受ける形で湿地や池があり、小規模ながらホタルが生息している。春先にはカタクリ、ニリンソウが咲き、付近一帯の雑木林は鳥、虫、花の生息地となっている。公園の広さは 5 万 7 千平方メートル、定期カウントはこの公園内と北側に隣接する湯殿川約 300 メートルを含めた区域である。



特徴・留意事項

①定期カウントコースとしては公園ということもあり非常にコンパクトで、よく整備されている。また、調査地が人口密集地に隣接しているため、散歩（犬連れも多い）、植物観察、写真撮影、花見などの利用者が多く、隣接する湯殿川では自転車、歩行者も多く、注意する必要がある。

②この調査地ではカワセミ会が 1989 年に巣箱を架け、以後毎年 12 月に利用状況の調査と清掃を行っている。

カウントの実際

(1)コ ー ス:実際のカウントは湯殿川の住吉橋から上流の時田大橋まで、その後公園内に入り、見晴台→水車小屋→奥の沢→二の丸広場→住吉神社と一周する。

(2)集合場所：「はす池」前広場（JR 横浜線片倉駅から徒歩約 10 分）

(3)集合時刻：午前 8 時 00 分（年間を通して同じ）終了予定時刻は 9 時半頃。

(4)駐 車 場：公園内にあり。

(5)危険個所：特にないが、湯殿川沿いの自動車、自転車との接触事故に注意が必要である。

(6)ト イ レ：公園内に 2 か所あり。

(7)観察ポイント

・住吉橋～時田大橋：アオサギ、ダイサギ、イソシギ、カワセミ、ツバメ、セグロセキレイ、スズメ、ムクドリ等。

・見晴台・菖蒲田・水車小屋：モズ、カワラヒワ、キジバト、シジュウカラ等。

・片倉沢・奥の沢・つつじ山・畑：ハシブトガラス、コゲラ、シメ、ハクセキレイ、エナガ、ガビチョウ等。

・二の丸広場・本丸広場：ハシボソガラス、シジュウカラ、コジュケイ、ウグイス、ツグミ、シロハラ、アオゲラ等。

・住吉神社・はす池：ヤマガラ、メジロ、カワセミ、カルガモ、ヒヨドリ等。

⑮ 長沼公園

概要

長沼公園は、浅川を見下ろす多摩丘陵の一角にある。標高は約 190m、広さ 33ha、ひとつの山の北側をそのまま公園としたような都立公園です。谷戸と尾根が入り組んだ園内はコナラ、クヌギ、クリなどの雑木林に覆われている。この公園の特徴は、自然状態のままの管理方式の公園で、地表はアズマネザサに覆われ見通しが悪い。雑木林も自然のままで、一部を除き萌芽更新等の管理は行わない、人の手の入らない公園である。なお、観察路、看板などは整備されている。

特徴・留意点

①駅から公園までの野鳥もカウントする。
②園内は、樹木、ササが伸びて見通しが悪い。野鳥の鳴き声でカウントすることが多い。
③休憩舎から平山口までの間は往復し行きのみカウントする。戻りは、新たに出た鳥はカウントする。

カウントの実際

(1)コ ー ス：長沼駅から公園長沼口より公園内へ、霧降の道→休憩舎→平山口→休憩舎→殿ヶ谷の道→六社宮(鳥合わせ)
(2)集合場所：京王線長沼駅
(3)集合時刻：8 時 00 分
(4)駐 車 場：数台分ありますが、進入路が狭い。
(5)危険個所：特に、危険な個所はないが未舗装の坂道が多いので滑るところがある。
(6)ト イ レ：登り切った尾根道に 1 か所。

（公園協会 HP より）

⑯高尾山小仏川：蛇滝橋～上椚田橋

概要

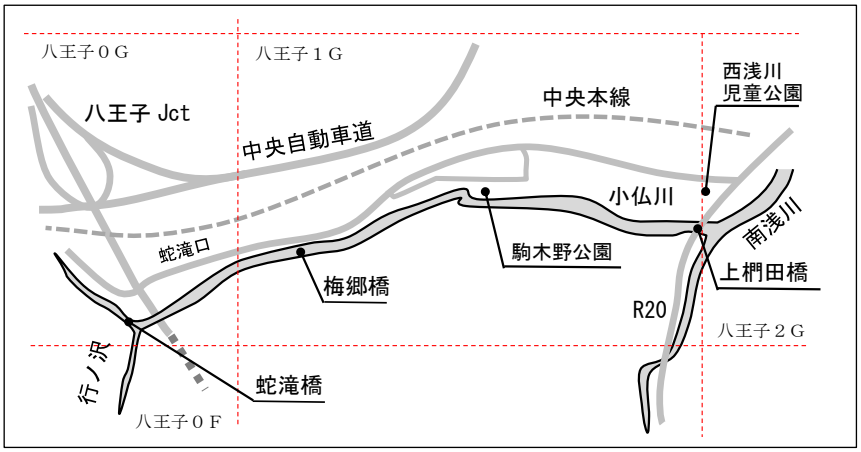
定期カウント地は小仏川の国道 20 号の上椚田橋から蛇滝橋までの約 1.5 キロメートルである。この間に橋が 5 つあるが、名前のついている橋はほぼ中間地点にある梅郷橋だけである。渓流的な要素が多いが、ほとんどの部分では護岸がされていて、ところどころ自然渓流の面影を残す場所がある。5 月から 6 月にはカジカガエルの声が至る所で聞こえ、ゲンジボタルもわずかながら生息している他、サナエトンボ、カワトンボ、ミヤマカワトンボがよく観察される。

高尾梅郷と呼ばれる梅林が川沿いに数ヶ所あり、上椚田橋はその基点になっている。左岸蛇滝下流側の梅林は首都圏中央連絡道路のトンネルが開通したため消滅した。

特徴・留意点

①道が狭いので、地元の人の散策、犬との散歩者、登山者等に出会った時は道を塞がないように注意する。

②途中の休憩は特に取らず、ゴール地点で休憩して、次の蛇滝コースの出発にそなえる。



カウントの実際

(1)コ　ー　ス：上椚田橋から左岸の道を上流に向かって進み、駒木野公園を過ぎると通称「ふかんど」と呼ばれる屈曲点の所に橋があるので、この橋を渡り右岸に移る。ゴール手前の名の無い橋（圏央道付近）の橋を渡り再度左岸に移る。

(2)集合場所：駐車場はないので、高尾駅又は高尾山口駅から徒歩（10～15 分）で上椚田橋に集合する。自転車で来る人は、西浅川児童公園の片隅に駐輪できる。

(3)集合時刻：年間を通じて午前 8 時である。8 時になるとスタートするので、遅刻した場合は後から追いかけてくれば、直ぐに追いつくことができる。
ゴールの蛇滝橋から引き続き「蛇滝コース」の定期カウントを行う。

(4)駐　車　場：ありません。

(5)危険個所：危険な場所はないが、道が悪いので転ばない注意、虫が多いので虫対策が必要である。

(6)ト　イ　レ：トイレはスタート地点の上椚田橋付近の西浅川児童公園にある。ゴール地点特養ホーム清明園にもあり、依頼すれば利用させてくれる。

(7)観察ポイント

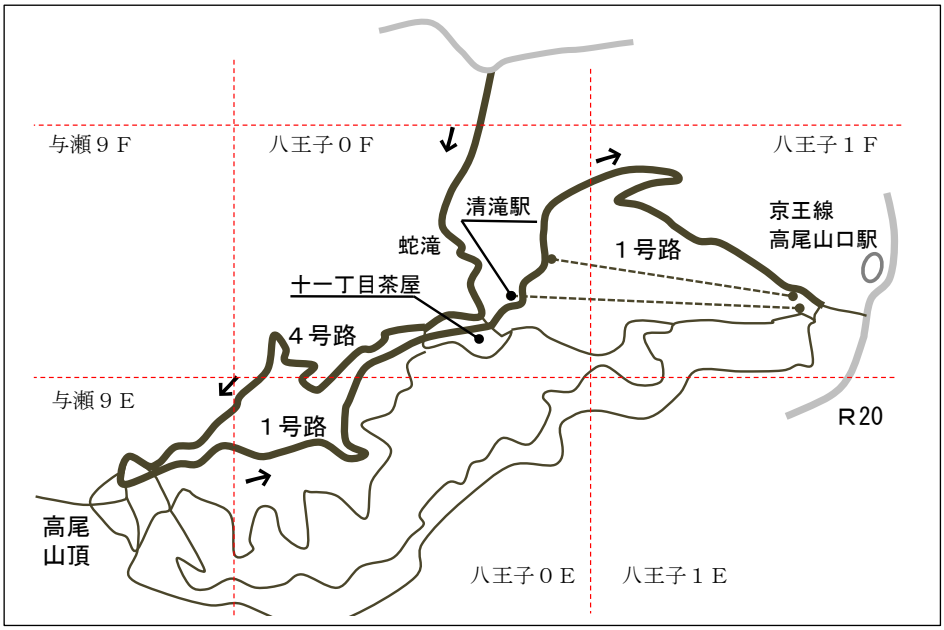
・コースの間の 5 つある橋のうち、実際に渡るのは 2 つである。渡らない橋の所でも必ず橋の上に行って、橋から上流側、下流側の川を丁寧に観察することが大切である。キセキレイ、カワガラス、カルガモなどを見つけることがある。

・カワセミ、キセキレイ、カワガラス、カルガモはどこにでも出る可能性がある。林の中ではカラ類の混群やケラ類、コジュケイ、ガビチョウに出会う。梅林にはホオジロの仲間、ツグミ等がいる。10 月初旬はサシバの渡りに出会うこともあるので、見落とさないよう空にも常に目を向ける。

⑰ 高尾山：蛇滝コース

概要

高尾山のハイキングコースの一部を歩く。小仏川の蛇滝橋から行の沢の林道を蛇滝まで進み、蛇滝から細い登山道をケーブルカー高尾山駅の西側まで登り 2 号路に入る。2 号路は距離が短く、4 号路に入ると途中釣り橋（みやま橋）があり、さらに進むといろはの道と合流する。4 号路をさらに登ると頂上手前のトイレがあり 1 号路に出る。ここから 5 号路に入り、江川杉の林から高尾ビジターセンターの裏側に出て高尾山山頂にたどり着く。下りは富士道から薬王院に出て、1 号路をケーブルカー高尾山駅、金毘羅台、布流の滝を経て登山口がゴールである。登り下り合わせて約 7ｋｍコースである。



特徴・留意点

①5 月、6 月、7 月はオオルリ等夏鳥調査を兼ねて行う。

②休日は混雑するので、平日に実施する。

③山頂と十一丁目茶屋前で蛇口から東京水道水（飲み水）を補充できる。

④蛇滝から細い登山道をケーブルカー山上駅の西側まで登り 2 号路に入る地点で第 1 回休憩、山頂高尾ビジターセンターの裏側のテーブルで昼食、十一丁目茶屋前のテーブルで第 2 回休憩、金毘羅台のテーブルで第 3 回休憩をとる。真夏にはさらに休憩場所を増やす。

⑤休憩の時、ザック等の荷物は道の谷側に置かず山側に置くという習慣をつける（谷川に置くと谷底に転がり落ちる危険がある）。

⑥冬期は残雪があるので簡易アイゼンを持参する。

カウントの実際

(1)コ ー ス：小仏川コースの終了後、記録用紙を変えて蛇滝橋から引き続き定期カウント実施する。ゴールは 1 号路の高尾山ケーブルカー清滝駅前。

(2)スタート場所：蛇滝橋

(3)集合時刻：9 時 30 分～10 時 30 分頃。終了時刻は 14 時 30 分から 16 時頃。

(4)駐 車 場：ありません。

(5)危険個所：特に危険な場所はないが、山道であるため谷側に足を踏み外さないように注意する。夏は暑さと虫対策、冬は道が凍結することがあるので軽アイゼンが必要なことがある。

(6)ト イ レ：トイレは山頂手前の 1 号路と 5 号路の交差点、山頂のビジターセンター隣り、薬王院、ケーブルカー高尾山駅前にある。

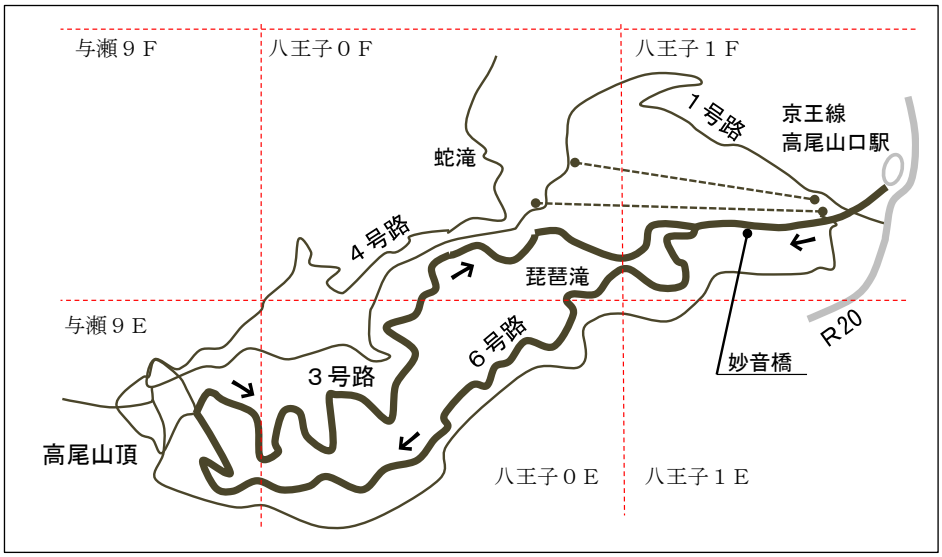
(7)観察ポイント

・山では鳥の姿の確認が困難の場合が多いので、鳥の鳴き声に最大限の注意を払う。
・初夏には 4 号路みやま橋付近でオオルリがモミの木のテッペンでさえずり、キビタキが樹間でよくさえずっている。
・初冬には蛇滝からの登山道で赤い実をつけるイイギリの実にツグミがやって来る。
・高尾山にはイヌブナが多く、数年置きに実が豊作となる年の冬はアトリの大集団がやって来る。
・10 月初旬はサシバの渡りに出会うこともあるので、見落とさないよう空にも常に目を向ける。
・蛇滝付近でミソサザイ、薬王院でキセキレイ、山頂付近でコサメビタキの営巣の可能性がある。
・ケーブルカー山上駅の駅舎では毎年ツバメが営巣している。
・1 号路タコ杉付近の針葉樹にキクイタダキがいる可能性がある。
・冬期はウソ、クロジ、カヤクグリ、ルリビタキ、シロハラ等が出ると思っていることが大切。
・時によりサンコウチョウ、トラツグミの声を聞くことがある。
・以前はヤマドリを観察したことがある。最近は出ていないが、林内の目配りは欠かさないこと。
・冬期はソウシチョウが集団で現れるが、繁殖期にも営巣している可能性もある。

⑱ 高尾山：琵琶滝コース

概要

高尾山ハイキングコースの沢沿いの道で、小仏層と呼ばれる地層の断層や褶曲も見ることができ、岩屋大師、琵琶滝がある６号路、常緑樹とスギ、ヒノキの植林の３号路と２号路、妙音橋近くには中里介山の庵跡があり変化にとんだ約７㎞のコースである。



特徴・留意点

①ハイシーズ（新緑の５月、紅葉の 11 月）は遠足、観光客でことのほかにぎわうので、マナーに気をつける。

②オオルリほか夏鳥の調査のコースでもある。

カウントの実際

(1)コ　ー　ス：京王線高尾山口駅から案内川（南浅川の上流部）の支流の前の沢に沿って進み妙音橋のたもとから６号路で山頂へ。３号路で、高尾山の南側の中腹をまき、浄心門への分岐から２号路の一部（南側）を通り、琵琶滝道を下り東京高尾病院を経て、妙音橋に戻る。

(2)集合場所：京王線高尾山口駅前

(3)集合時刻：9:00～15:00

(4)駐　車　場：駅前市営駐車場、薬王院祈祷殿駐車場（ともに有料）ハイシーズンは、駐車できないこともある

(5)危険個所：せまいところのすれ違い、琵琶滝道の転倒、滑落に注意。

(6)ト　イ　レ：高尾山口駅付近５ヶ所、清滝駅、山頂２ヶ所

(7)観察ポイント

・６号路は、沢（前の沢）沿いの道で、春は、タゴガエルの声が聴こえ、フサザクラ、アブラチャンの花が咲く。夏は、オオルリ、サンコウチョウが囀り、セッコク、イワタバコ、タマアジサイが咲く。秋は、イロハモミジ、チドリノキの紅葉。冬は、クロジ、シロハラが見られる。

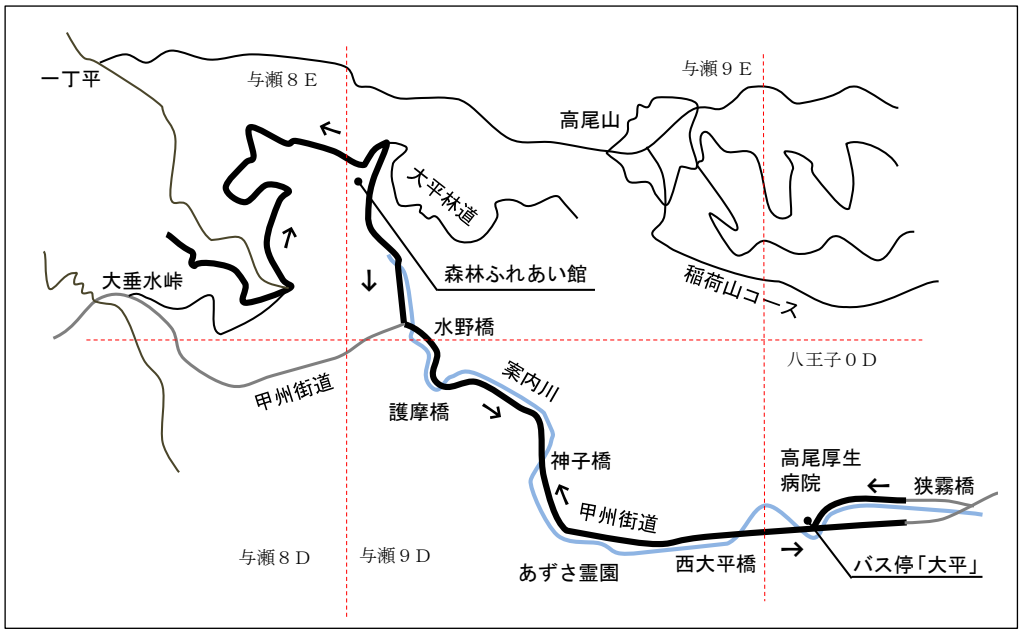
・３号路と２号路は、針葉樹（スギ、ヒノキ、モミ）の混じる常緑樹林（カシ類、ヤブツバキ、カゴノキなど）の比較的平坦な道で、春は、スミレ類、ヤマルリソウが咲き、冬は、カラ類の混群、キクイタダキ、ときには、マヒワの群れが移動してゆく。

・休憩は弁天丸のベンチ、大山橋のベンチ。山頂で昼食。持ち物服装は長袖、長ズボン、軽登山靴、軽アイゼン（凍結時）、雨具、弁当、飲み物。

⑲ 高尾山：大垂水コース

概要

このコースは南浅川の支流案内川上流の大垂水峠付近である。具体的には国道 20 号（甲州街道）高尾橋西約 2 ㎞の大平バス停付近から大平林道入口までの両側と、大平林道の一丁平・大垂水峠分岐先約 600m までの高尾山西南地域である。大半は国有林。東京・平塚営林署管理の造営林で、スギ・ヒノキ等が植栽されている。年間を通して伐採を伴う造林作業が行われ、チエンソーや集材機の音が響き、積み出し用のトラックが時々通行している。作業に伴う通行止めや通行注意の看板がよく掲出されている。



2002 年 6 月に大平林道の中程に鉄筋 2 階建ての「森林ふれあい館」が完成し、林業体験の拠点となっているが、利用はそれほど多くはない。

また、高尾山口駅から大平林道入口の途中にある、ごん助・山の神・あまぎ（いずれも食堂）周辺や高尾厚生病院、あずさ霊園も調査対象にしている。

特徴・留意事項

①大平林道は全コースの殆どがスギ・ヒノキ・モミ等の植林地であったり、傾斜地であったりするため、野鳥の姿を視認することが難しい場合が多い。声のみで識別・同定することが多くなる。

②林道はよく整備されているが、大雨の後は崖崩れが発生することもあり注意を要する。また、高尾山のハイキングコースでもあるので、登山者にも出会うことがあるが主要ルートではないのでそれほど多くはない。

③調査区間を路線バスが走っているが、本数が少ない。

カウントの実際

(1)コース：あずさ霊園付近の国道 20 号の路肩に駐車→国道 20 号を大平林道入口→森林ふれあい館→稲荷山コース分岐→旧作業小屋跡→一丁平・大垂水峠分岐→その先約 600m地点（分岐から 2 つ目のカーブミラー。消火用水タンクあり。）までを往復する。約 11,000 歩。更に、あずさ霊園の園内を一周する。車で移動後、ごん助裏の「諸井さん」宅前の路肩に駐車し、ごん助・山の神・あまぎ、高尾厚生病院付近（大平バス停）を調査する。高尾山口駅又は高尾駅北口まで調査担当者が送り解散となる。

(2)集合場所：調査参加希望者は前日までに、調査担当者に連絡し、待ち合わせ場所（高尾山口駅を出て国道 20 号を大垂水峠方面へ 100mの「コンビニエンスストア」、または「高尾駅北口」等）の確認をする。

(3)集合時刻：原則毎月第一木曜日。調査時間：原則 8:00～11：00。

(4)駐　車　場：数台であれば上記のコース上で可能。多い場合は、あずさ霊園に事前許可を得れば可。

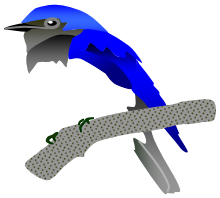
(5)危険個所：国道 20 号の約 200m区間に歩道が設置されてないので、交通事故に注意する。

(6)ト　イ　レ：あずさ霊園に 2 ケ所。利用する場合は一言断ること。

(7)観察ポイント

他の調査地区に比べ、種類数・羽数ともに少ない。また、全コース特定種が出現する場所は固定されてなくどこでもでる可能性がある。強いてあげれば次の場所。

・稲荷山コース分岐：ホオジロ、ルリビタキ、ウソ、ガビチョウ。
・旧作業小屋跡：エナガ、ジョウビタキ、イカル、オオルリ、コゲラ。
・一丁平分岐（付近・手前）：ツツドリ、キビタキ、ヒガラ。
・あずさ霊園：トビ、ノスリ、ツバメ、キセキレイ。
・大平バス停：スズメ、カルガモ、アオサギ、モズ。



（大平林道入口付近）

（森林ふれあい館）

（折返し付近）

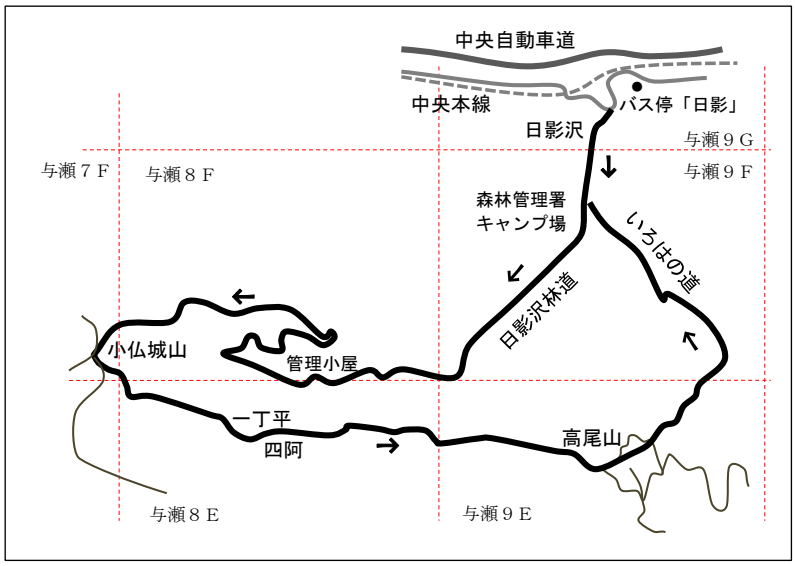
（大平バス停付近）

⑳ 高尾山：日影沢～小仏城山

概要

全行程 7.5Km で、所要時間は 6 時間～7 時間である。高低差が約 370m、途中アップダウンのきついところもあるが、平均的になだらかである。明治の森国定公園の中なので登山道（カウントコース）はよく整備されて、定期的に登山道脇の下草刈りも行われている。

コースは日影沢入口から小仏川を渡り日影沢林道に入る。東京森林管理署キャンプ場を経て車止め柵まで沢伝いに進む（約 2.2Km）。その先、日影沢を離れて杉林を突きって進み、数年前に林道両側の杉を伐採し、コナラ等広葉樹を植林したところでにでる。今は、植栽木が小さいので草原、沢筋の杉の梢や上空を飛ぶ鳥が期待できるところである。高尾山から小仏峠に至る登山道を突きって小仏城山頂上へ進む。頂上からは、一丁平を経て高尾山から、いろはの森に進む（2.5Km）。この間は行楽シーズンや休日は登山者が多い。いろはの森は急斜面の下りでツガ、ヒノキ、ミズキ、コナラなど大きな木々の森である。下りきって日影沢林道の森林管理署キャンプ場までがコースである。



特徴・留意点

①ハイカーとの接触に注意。下りは滑るので慎重に行動する。
②一部携帯電話の電波が届かない（圏外である）。
③冬は、簡易アイゼンが必須
④所要時間 6・7 時間を要するので、弁当、雨具、水筒、冬期は防寒具などハイキング程度の装備が必要

カウントの実際

(1)コ ー ス：日影沢駐車場→（日影沢林道）→森林管理署キャンプ場→小仏城山→一丁平→高尾山→（いろはの道）→森林管理署
(2)集合場所：JR 高尾駅北口から小仏行きバス、「日影」下車数分
(3)集合時刻：春夏 6 時頃、秋冬 7 時頃
(4)駐 車 場：日影沢入口に数台分（公式ではない。）
(5)危険個所：「いろはの道」の下り坂。
(6)ト イ レ：森林管理署キャンプ場、小仏城山、一丁平、高尾山頂下にある。
(7)観察ポイント
・森林管理署キャンプ場付近。
・小仏城山～一丁平付近の混交林付近。

あ と が き

～未来への継続、そして新しい「参加者」の皆さんへ～

定期カウントを成功させるためには、「長く続けること」と「多くの会員が参加すること」が必須です。どうすれば長く続けられるでしょうか？　定期カウントに参加する意味は何でしょうか？

定期カウントを長続きさせるために

先ず、定期カウントを長続きさせる基本は楽しみながら行うことです。何事もそうですが、楽しくなければ長続きしません。毎月、同じフィールドを観察していると季節の変化を五感で感じ取ることができます。そこには喜びや驚きや感動があります。あるがままの自然の中で躍動する野鳥たちと出会って感動が生まれればしめたものです。この感動こそが長続きの原動力です。仲間と一緒であれば楽しみ、喜び、驚き、感動を分かち合うことができます。仲間とこのような感動を共有することで、原動力が倍増します。

次に、定期カウントは「自然保護活動の基礎的な部分を担っている」と認識しましょう。自然保護を進めるうえで基礎となる科学的データは必要不可欠です。定期カウントはこの科学的データを蓄積するという大変重要な役割を担っています。これは立派な社会貢献活動です。定期カウントに参加することにより社会に貢献しているということを意識することが大切です。

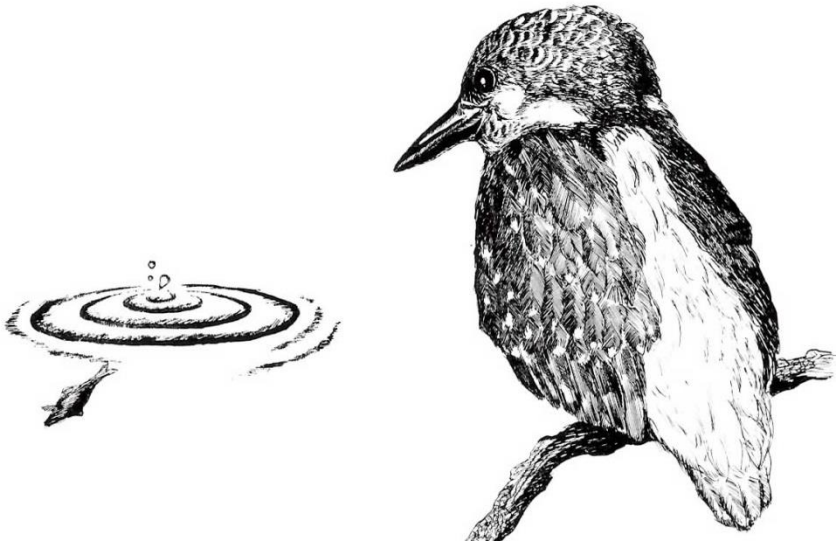
更に、定期カウントに参加すると野鳥をより精確に観察しようという気持ちが起こり、積極的に勉強するようになります。そして識別・同定力が格段に向上します。鳥だけでなく野鳥の周りの植物、昆虫、その他多種類の生きものにも目が向き、自然環境全体にも関心が高まります。その結果、自らが成長し続けていることや精神的な豊かさを認識できるようになります。このように「成長し続けようと思う気持ち」を認識することが定期カウントを長続きさせる心のよりどころになります。

毎月の定期カウントを義務だと感じると長続きしません。義務感から解放されるためには各定期カウントコースの担当者は、例えば「体調不良の時は無理をせず、ほかの人に交替を依頼する。依頼された人は快諾する。」というような協力態勢を普段から築いておきたいものです。

新しい定期カウントへの参加者の皆さんへ

定期カウントの各コースには、担当者の他に大勢の“参加者”が参加されています。毎月発行されている「探鳥会あんない」に「翌月の野鳥定期カウント実施予定」が掲載されますが、ここに掲載されているコースは誰でも自由に参加できます。ここに掲載されてないコースでも担当者と事前に連絡をとれば参加は可能です。まだ参加されたことのない方、私でもいいのかしら、と参加をためらっていられる方、どうぞ“定期カウントの新しい参加者”になってください。

定期カウントは通常の探鳥会と違い、野鳥を見つけ、数をカウントして記録するという大切な役割があります。多くの目で、耳で野鳥を見つけることが定期カウントの基本です。野鳥を見つけることにあなたも大きく貢献できます。定期カウントがどのような考え方で、どのように実施されているか知っておくと定期カウントへの参加が楽しくなるはずです。そのためにこのマニュアルをよく読んで、気軽にどこかの定期カウントコースに参加してください。



絵；湯原直彦さん（元会員）

八王子・日野カワセミ会　定期カウントマニュアル

作成日：　2014 年 2 月（平成 26 年）
作　成：　八王子・日野カワセミ会　定期カウントマニュアル作成委員会
委　員：　阿江範彦　粕谷和夫　加藤岸男　門口一雄　久保山嘉男
千葉槇子　長谷川篤　丸山二三夫　若狭誠　渡辺敬明
発行者：　八王子・日野カワセミ会　会長　粕谷和夫
URL：http://kawasemi.fan-site.net/
問合せ先：定期カウント作成委員会　門口一雄
E-mail：k.kadoguchi.h@nifty.com
電話：042-635-6886